ざる也。請ふ詳に之を言はん。夫れ二百石は士の常祿也。二百石なる能はざれば、出でては以て士の事を行ふに足らず、入つては以て祭祀を守り父母を養ひ妻子を畜ふに足らず。是れ何ぞ以て士と爲さんや。所謂二百石以上にして後可なる者は、士たるの常なる者を語る也、何ぞ以て重しと爲すに足らんや。所謂重祿は萬に千を取り、千に百を取る、之を重祿と謂ふ。純何ぞ敢て之を望まん。曩時木順菴加賀に仕へ、藤宗恕越前に仕ふ。皆五百石を以てす。二子は誠に先覺なり。然れども今を以て之を觀れば、未だ其畏る可きを見ざる也。若し夫の野順清の桑那に仕へ、大高生の松山に仕ふ、皆樸樕の材を以て四百石を食む。是れ何の幸ぞや。其他諸侯の國に在りて、二百石以上を食む者、抑も何ぞ限らむ。之を要するに儒名ありて其實なき者、比々として皆是れなり。然るに榮達彼の如き者、他なし、時に遇ふ也。故に純も亦未だ二百石を以て富めりと爲さゞる也と。

春壑疾む。原芸澤(名は尙賢、字は子才)脈を診して曰く、先生遺言なくば止む、有らば則ち之を言へ、它日疾病ならば、言意の如くならざらんと。春壑喜んで曰く、子の才誠に世醫の起たざるを視て猶面訣するが如きに非ざる也と。即ち囑するに後事を以てす。觀海行狀を作り、南郭墓記を撰す。皆其遺言なり。

春壑に子なし。義子零替祭を修めず。寛政八年五十年の忌辰に値ふ。書南嵩山房、非鷹を陳して墓に祭り、爲めに一片の小石を墓碣の下に建て、以て其の恩に浴する事を紀す。墓は江戸谷中天眼寺の側に在り。

五一　服南郭

〔服元喬、字は子遷、小字は小右衛門、南郭と號し、又芙渠館と號す。姓は服部、修して服氏と爲す、平安の人。〕

南郭齡十四にして江戸に來り、十六起つて柳澤侯に仕へ、三十四にして致仕す。乃ち帷を下して徒に授く。其學は之を徂徠に得。而して才氣俊拔、遂に詩文を以て一世に山斗たり。其の柳大夫に答ふる書中に、碧官を罷むる所以を陳す。曰く、昔嘗て先侯の世、薄技を大藩に奉じ、猥りに弄臣の末に侍することを得、竊に惟へば當時先侯の恩、山高く海深し、乃ち爵を貴むるに其不能を以てせず。以爲らく文史の小、小人習ふ所片長使ふ可しと。是を以て啻に罪戾を免るゝのみならず、苟くも乏きに承けて顧問に備はるとを獲たり。亦唯臣を知るは君に如くは莫し。乃ち先侯恩を懷むの餘り、嘗て私に爵

に命じて曰く、予女を疵瑕とせざる也。後の人將に多きを女に求めんとせば、我れ千秋の後、女其れ行かんか。如かず女に名を成さしめんには。他日或は四方に適き、我れ女を知らずと謂ふこと無れと喬感泣骨に刻み、私心自ら誓ふ。何くも亡く先侯世に即く。即ち大藩も亦貸恩多し。尋いて乃ち玦を賜ひ、首領を全うして草野に放歸するを得たりと。

南郭人と爲り風流溫藉、藝苑の士雅慕せざる者莫し。其の來りて東倅を薦むる者、甚だ衆し。大低歳に金百五十餘兩を得たり。凡そ儒を以て生理を爲す、其饒裕此の如きは鮮し。嘗て莊子を讀ず。聽徒寔に夥しく、内外市を爲す。是時に當つて、京師の松岡玄達、本草を講ず。其盛んなること南郭に匹すと云ふ。

南郭兼て繪事を善くす。恒に言ふ、日本の畫は僧雪舟、狩野元信を以て至れりと爲す。八種畫譜の如き、所謂隸畫は見るに足らざる也と。秋玉山が服翁墨竹記に曰く、予翁が醉畫芭蕉を收む。偶ゝ人に取去られ。今復存せず。予今翁の遺畫を觀る、涔々として涕下り、口盲ふと能はず。炙を欲するの色、蓋し亦外に形はる。仲英因つて翁が十三四歳の時爲る所の墨竹一紙を以て、之を贈る。其末に周雪窩の三字あり、蓋し幼字なり。其千尺霄を干す者、蓋し既に此に崩す。今を距ること六十餘年、墨淋漓

として新なるが如し云々と。

幼時京を出づ。老に投じて歸遊す。時に親眷舊故、皆既に土中の人と爲る。故鄉却つて他鄉の如し。詩あり、云く、「五十年前上京を出づ、今遊猶客中の情を作す、別れ長くして何れの處にか桑梓を尋れん、祚薄うして家に弟兄を訪ふなし、山川を認め得て夢寐かと疑ふ、想來多少自ら分明、共に知る人寰の裏に流轉せしを、愧づ劉郎の赤城に返るに似たるを、」と。

南郭頗る國風に通ず。嘗て神戸侯の浮洲の別墅に遊び、倭歌を賦して興を遣る。歌に曰く、「しづかなる、いけのこゝろを、みづとりの、うきすのなみの、たつとしもなし、」と。南郭の父、名は元矩北村季吟に事へて國風を善くす。故に其の遺を承くと云ふ。

唐詩選附言を作る。稿を以て徂徠に視して資問す。徂徠見て曰く。再び之を思へと。乃ち鍛煉數日にして、復改め出す。徂徠又曰く、未しと。凡そ五たび撰んで、始めて徂徠の許可を得、以て剞劂に授く。

南郭、唐土を稱ふるに海外、或は彼邦、彼方を以てす。未だ嘗て中華、中國と稱せず。徂徠が自ら東夷の物茂卿と題すると大に庭逕あり。知不足齋叢書中に論語皇疏を收む。而して南郭が序中に、中

華の字あり。此れ鮑以文が海外を改易せしのみ。

南郭、詩文は尤も長ずる所、經義は蓋し其短處、故に其言人或は服せず。徂徠の喪に當りて、門人集議す。南郭禮記正義を引いて、以て一事を辨ず。而して皆疑つて杜撰と爲す。再び曩昔之を某篇に得と言ふに至るも猶信ぜず。

南郭は經濟を談ぜず。毎に曰く、熊澤了介の如き、才經世を抱き、身要地に居る。故に言行はれ功建つ。世儒の當世を談ずる、或は靡々聽く可しと雖も、時施す可からず。彊て施すときは則ち果して國を誤る。之を要するに身樞筦に居らざれば、徒に辨給己を售る耳。老子曰く、知者は言はずと。斯言諒なりと。

南郭曰く、宋儒窮理の說、豈に其宗旨を極め易からんや。今人四書集註猶且つ之を精うする能はず。亢頑自ら朱學と稱す。一笑を發す可し。此邦朱の意を得る者、其れ唯山崎闇齋かと。

南郭集は、初編より四編に至る、凡そ四十卷、世に刊行す。而して詩文共に四編を以て佳致に造ると爲す。僧大典曰く、南郭の文は第四編を妙手と爲す、初編は議す可き者多し。二編三編は未だ至れりと爲さずと。江邨北海詩を論じて曰く、南郭は能く地步を守りて、勝を一句一章に求めず。而して功

を一卷一集に全うす。今其集を閱するに、初編は瑕纇頗る多し。二編は十に二三を存す。三編四編は最も粹然たり。乃ち知る此老、剪裁老いて益々精到と。然るに酸鹹嗜好は各々喜ぶ所あり。東藍田が小栗元卿に答ふる書に云く、不佞壯歲にして諸老先生に從つて、芙渠館の文を論ず。誠に本邦に於て比無きは則ち比なし。然るに其初編は則ち未だ混化の地に至らず。是を以て斧斤材を取り、襲踏の痕蹟多く見はる。若し夫れ二編三編は、一切圓機混化して蹤なし、或は得意の編に至つては、則ち李王以下敢て齒せざる也。四編は則ち衰ふと。宇士新、南郭が守秀緯を送るの序を評して曰く、子遷は濟南を學び、自ら謂へらく之を得と。此編は卽ち其擬する者、然れども濟南は潔にして深し。子遷は蕪にして淺し。門牆猶遠し。何ぞ堂室を論ぜん。蓋し天才秀異、結撰に苦まず、故に學に乏しく、思に少なく事に疎にして、而して字に味し。其の李文に於ける、未だ盡く解する能はず。是を以て未だ其法を得ず。自遜の如きに至つては、亦倭陋多し。然りと雖も子遷は猶論ず可し。餘は未だ論ず可からざる也。吾祖曰く、南郭は天才流麗、其詩合作の者、眞に古人に配するに足る。然れども其聲律動もすれば法度を失ふ。是れ學力の足らざる處。文に至りては大較婉佻、浮にして實に乏しく、雜にして法に淺し。譽一世に高しと雖も、而も實殊に稱はず。物茂卿嘗て其初稿に序して云く、他日子遷をして

一方に木鐸たらしめば、時の教庶幾くは之を一世に被はん。文も亦然り、然れども其悲にして才敏なるや、故に其巧と俊と終に或は全く之を閉る能はず。時に之れを出だす。子遷乃ち有らざる所なきのみ。見る可し、茂卿の其徒に私すと雖も、其の之が爲めに諱掩す可からざるを以て也。

高蘭亭曰く、余南郭と友たること十數年、未だ嘗て喜愠の色を見ず。其平生已の好む所に隨ひ、毀譽拘はらず。物と競ふ無し。頗る謝安の人と爲りに類す。

又、南郭に問うて曰く、先生の詩誰を以て準的と爲すと。曰く、余は必ずしも誦法する所有るに非ず。初年唯好んで杜詩を讀む、今にして縮に之を思ふに、拙劣と雖も、間杜の髣髴を得たる者、蓋し此れが爲めの故也と。

男惟恭、字は原卿、才藻卓絶、乃父の風あり。惜い哉、痘を病んで沒す。年纔に十七、南郭其墓に誄す。詩あり、鐘情集と名づく。

南郭年既に老い。醍園の名流凋喪畧盡き、歸然として獨り存す。是れを以て名望益重し。太宰德夫、藤東壁、松子允、縣次公、平子和、越君瑞が墓門の記、南郭皆之を撰す。

品川東海寺中の少林院に、南郭の墓在り。碑の高さ二尺餘、廣厚一尺許、其正面は、楷字にて南郭先生墓の五字を刻す。左右後の三面は、一字を勒せず。每歲、忌辰六月二十一日を以て、其徒斯に集會し、各〻詩を賦して之を弔す。沒せし寅曆乙卯より、今に至るまで絶えず。

五二　服仲英

〔服元雄、字は仲英、小字は多内、南郭の義子。攝津の人。〕

仲英の父某は、西宮の祝人たり。嘗て主祠の貪汚を訴ふ。反つて其の爪翼に構誣せられ、竟に放逐せられ、流落を以て死す。死に臨み、顧みて仲英に謂つて曰く、吾れ寃に逢うて自ら雪ぐこと能はず。兒時を待つて狀を申べ、鬼をして父母の國に歸るを得しめよと。仲英痛心骨を刺す。乃ち江戸に至り、天に籲で三たび之を官に鳴らし、事始めて辨ずるを得、父をして舊に仍つて、祀を西宮の祠中に享けしむ。

仲英、南郭の指授を得、儒雅の士となる。已に門を開いて人に教ふ。未だ幾ならずして、南郭丈夫の子皆亡す。季女あり。仲英就いて贅す。仲英本姓は中西、是に於て服氏を冒す。其子孫今に至るまで、世々南郭の故宅に住して。家聲を墜さず。是れ古人の希に覩る所也。

仲英最も詩を善くす。而して南郭と頗る途を異にす。餘熊耳、踏海集に跋して之を論ず。其略に曰く、蓋し仲英は述作に於て、別に自ら機軸を出だし、以て一家を爲さんと欲する者のみ。嘗て曰く、苟くも我れに得る所あらば、家風と雖も守らざる所なり。我れ不肖と雖も、豈に步趨して自ら施すこと能はず。徒に人に從つて周旋し、此れを以て家聲を墜さずと爲すに至らんやと。則ち其志以て觀る可し。蓋し仲英の郭翁に館するに方りて、或は以て後たるに難ずる者あり。故に言之に及ぶのみ。余嘗て其房を過ぎ、几上に端明集有るを見る。乃ち亦知る、其文に於て漢を必せず、詩に於て唐を必せず、將に衆美を集めて、以て大を成さんとする者也。而して退いて其の爲る所を省みるに、文漢を必せざるも、未だ嘗て漢ならずんばあらず、詩唐を必せざるも、未だ嘗て唐ならずんばあらず、而して二者睹を宋に雜へて、未だ嘗て宋に墜ちず、則ち必ずしも守らざる所ゝ亦も、而も竟に未だ家風を以てせざることを得ざるなり。

五三　藤東野

〔藤煥圖、字は東壁、小字は仁右衛門、東野と號す。下野の人也。〕

東野本姓は瀧田氏、幼にして孤と爲り、乃ち江戸に來りて安藤氏に養はる。因つて其姓を冒す。又修めて藤と爲す。初め中野撝謙に學び、幾もなくして更めて徂徠を師とし、憤激自ら奮ひ、才氣大に發す。是に於て儒を以て柳澤侯に仕ふ。年二十九にして官を罷む。侯猶優待粟を輸すと云ふ。徂徠の始めて古文辭を唱ふるや、世の學者舊聞に率かれて之を信ずる者罕なり。東野は縣周南と早く諸子に先だつて之に歸す。東野最も肯綮を得。徂徠の終に海内に木鐸たる、東野實に之が贊翼す。

東野家屢〻空し。嘗て書を徂徠に寄せて財を借る。徂徠誤り解して其數を違ふ。今各書を左に撮錄す。東野の書に曰く、向に書舖天中記を齎して至る。曰く、九日邇に在り、主人黃白に渴する切なり。交金は節前に在り、二圓三方にして易ふることを得ん。若し能はざれば、三圓二方にして獲ることを請ふ者先きに在りと。不佞此物に渴すること久し。唯圓にして方なる者、猶之れ其渴のごとし。先生其れ或は能く僕の爲めに一朝の供を損し、其渴を免れしめんや否や。九月吾れ能はず、其れ十月に至りて、必ず能く算帳を了らん。伏して方便を冀ふ。千祈萬祝と。徂徠の答書に曰く、承く金を求む。其言は周の蝌斗時の券契の狀の若し。子幸に天王家に生れず。天王は則ち必ず春秋に書せん。子の求貸を爲す所、蓋し呂にして足らず、品にして餘りあり。品か品か。是れ亦易々たるのみ。書き訖りて

東方朔郭舍人が爲す所の隱者を覺ゆ。聊か病牀の一玩に供するのみと。東野又、書に曰く。所謂二天三地は、向に既に以て先生の諸を蒙むる。唯先生其方なる者を品す。乃ち僕又、隨つて之を圓ならしめんと欲す。未だ知らず能く易々たるか否か。九十月の間、廩米目に在り、伏して冀くば握中の玉をして他人に是れ歸する無からしめよ。則ち人をして僕を智囊と稱せしむる者、實に此物に在る也。即ち毳毛と雖も、然れども亦倘くば先生六翮間の物也。力新甫。蘊として信に餘りあり。若し附せらるゝを蒙らば、亦僕が親受に等しき也と。徂徠又、答書に曰く。鄉に所謂蝌斗時の券帖なる者、予嘗て誤り謂ふ方なる者三と。足下則ち之を篆にす。是れ予が月俸の餘を併せて、優遊歲を卒る所の者、何を以て能く足下の需に應ぜんや。然りと雖も足下則ち曰く、九十月の交云爾と。猶之れ外府のごときかな。且や篆の蝌斗の時を距ること未だ遠からずと爲す。吾れ過てり。謹んで圖々の者三を以て、諸れを左右に致すと。

東野俊傑不群、之に加ふるに刻苦淬勵天性に出づ。其鴻文鉅藻は既に藝苑に魁たり。惜いかな卒に劬悴を以て咯血の疾を致して沒す。年僅かに三十七。世に交はれると交はらざる者とを問はず、之を惜まざるは莫し。嗚呼天少しく之に年を假さば、殆んど量る可からざる也。

徂徠の東野に於ける、才學優長なると且つ門に及ぶもの〻最も先なるとを以て、之を愛重す。疾みて終るに至り惜むこと甚し。其徒に與ふるの書に、言之れに及べば、讀者をして感動せしむ。一二を左に擧ぐ。富春山人に與へて曰く。獨り悲しむ、東壁四月十三日を以て死す。渠三世大淵默を以て降り、亦終に之を以て降る。記す十年前、渠齡長吉と同じ、而して殆んど將に心肝を嘔出して死せんとし、而も死せず。今遂に心肝を嘔出して死す、豈に白玉樓記必ず其人を待つか。天圖書の府以て久虛す可からざるか。悲しいかな。渠は子なし、而して孀煢々として歸する所なし。渠が親戚孀の槀を魂つて裸にせんと欲す。余輩力めて之を爭ふ。廼ち免る。又其冢に塔婆せんと欲す。諸友人匍匐して之を救ふ。廼ち金を糾め石を買つて之を碑建し、百歲の後をして其儒者の墓たるを識らしむ。渠平生著す所其槀を留めず、諸友人百方之を求め、謄錄卷を爲す者僅かに三。且つ其遠きに在る者悉く集るを俟つて、而して後に之を梓し、諸友人が爲る所の碑志及哭詩祭文を彙めて、以て其後に附す。庶くは以て渠を不朽とするに足らん。足下豈に渠が甲を裏にして送りし時の事を忘れんや。足下渠が詩若くは文を藏せば、則ち之を寫致せよ。渠已に散ずるの魂、庶くば亦來り歸らんかなと。又、香國禪師に與へて曰く、渠平生其親戚の力を得ず、唯不佞に是れ倚る。故に其疾と死とに當りて、不佞の百事皆

廢す。是れ其久しく留めて師の書に報いざる所以の故也。蓋し昔者師を草堂に享す。樂を張るや、東壁横吹して之を倡ふ。詩を賦するや、東壁曼聲して之を和す。而して師賜ふ所の金巨羅、亦東壁能く三酌して之を賞す。今則ち亡しと。又、下館侯に與ふるに曰く。十二日不佞往いて視れば、則ち相顧みて曰く、歲は大淵獻に在り、吾れ東壁に歸するの期至る、世心世肝既に已に嘔盡すと。辭氣壯なること甚し。渠蓋し不佞爲る所の字說中の語を記して爾か云ふ。不佞謂ふ、猶尙能く戲る、且く死せずと。翌日訃至る、悲いかな。渠が貧窶は君侯の知る所、君侯卵にして之を翼したるは、不佞諸人の知る所、然れども其貧を免れて死する能はず。貧は固より士の常、庸何ぞ傷まんか。渠の才と學とを以て、而して之に假すに年を以てせんか、豈に不佞の能く及ぶ所ならんや。天之を貧にし之を窶し、又、之が年を奪ひ、加ふるに後無きを以てす。何ぞ其れ毒なるや。不佞も亦祝予の嘆を免れんかと。

東野の沒後二十年、遺稿三卷刻始めて成る。春臺が序に、初め本多侯將に貲を捐して之を刊せんとし、而も終に事を果さゞるを陳す。此序は春臺文集に載する所の者、二百七十八字多し、皆侯を刺るなり。蓋し侯ふに字印を布いて一版を爲らんとするや。徂徠侯に呈するの書に曰く、承く活字頗る成ると。則ち東壁且に朽ちざらんとす。且つ之子鬚なし、豈に字に鬚あらしむ可けんやと。

宇士新の大潮禪師に與ふる書に曰く。夫れ元美は世の推す所、誰か晞せざる者ぞ、而して庶幾する者鮮し。獨り吾が物翁新意縱横、是れ大海の紫瀾か。藤東壁、長語或は庶幾ありと。近時僧大典、能文を以て時名を擅にす。毎に曰く、蘐園の徒、文章を善くする者獨り藤東壁と。

東野墓碑の銘は、服南郭撰し、誌銘は秋濬園撰す。墓は淺草茅原福壽院に在り。一小石碑に銘序を勒す。後に同盟十有七人皆を合せて之を立つと刻す。

五四　山縣周南

〔山縣孝孺、字は次公、小字は少助、周南と號す。周防の人。國侯に仕ふ。〕

周南の父長白、字は子成、長門に宦して職師儒に居る。周南が家學を墜さゞるを欲し、携へて江戸に至り、徂徠に托して業を受けしむ。時に周南年甫めて十九、英特にして才氣を負ふ。已に家庭に學び、其大義に通ず。徂徠に見ゆるに及び、孜々として更に他念なし。學日に益々進む。是時徂徠の業未だ大に振はず、而して周南、東野早く其門に登り、迭ひに羽翼を爲す。是を以て徂徠大家を成すに及び、二子を待つこと群弟子に異なると云ふ。

正德辛卯、朝鮮の信使、途に長州を歴、赤間關に館す。周南乃ち君命を奉じて之に接對す。筆談唱酬、信使其儁才に驚く。雨伯陽嘗て稱して海西無雙と曰ふ。徂徠の書に曰く、夫れ雨生は、故と以て天下を輕重するに足らず。然りと雖も海西とは筑以南を苞みて之を言ふ、之を無雙と謂ふ者、之と與に京なる莫き也。盛んなるかな言や。足下に非ずんば未だ以て之に當るに足らず。吾れ始め以爲らく海内唯足下と東壁と、今より後、又、雨生あり。

周南は南郭より少きと四歳、文章及ばずと雖も、亦自ら不朽なるに足る。然るに陷然自ら足らず、病中尚書を南郭に寄せて曰く、今疾年を踰えて已えず、岌々乎たり。傾く者必ず覆へる、幾ど起たず。予文辭に於て喻る所無きは、老兄の熟知する所也。諸友門人梓して傳へんと欲するも、拒んで允さず。數々請ひて數々拒む。今に於て數年所、余死せば彼れ必ず其意を行はん。其意を行はゞ必ず諸を老兄に圖らん。請ふ足下を勞せん、我が爲めに蕪を刈り茀を除き、略繩墨を存して、同社の貽を貽すこと莫くんば幸甚と。

徂徠の古人に於ける、掊擊詆訶餘力を遺さず。其徒口脗を承襲して浸々厚道を失ふ。獨り周南溫良馴雅、其持論稍々平かなり。吉齋漫錄の後に書して曰く、向に東都に在り、或は言ふ者あり、仁齋先

生學を唱ふ、本帳中の書あり、諸弟子輩與り見るを得ず。曰く、吉齋漫錄、曰く甕記、曰く櫝記と。余甚だ信ぜず。既にして漫錄を見るを得。其言鑿々として味あり。所謂理氣性命、宋學の謬誤學既に發揮す。實に先づ我口の嗜む所を得る者也。夫れ述べて作らざるは、君子の道、仁齋何ぞ珠を竊み櫝を遺へすの陋あらんや。苟くも是れ之を述ぶ、惡んぞ其書一言も相援及せずして、自ら古處する者あらんや。願ふに其書既に成るの後適々諸を見るか、或は不幸にして終身見るを得ざる者ありしか、皆知る可からざる也。是れを以て仁齋を刺るは誣なり。

酸苑の徒、春臺獨り禮法を以て自ら任とす。且つ其賦性の嚴なる、辯論の勁なる、縱ひ疑ふ所あるも其徒敢て議せず。而して獨り周南は能く之に忠告す。其書に曰く、日者に子遷の所に於て老兄が鎌倉紀行を見るを得たり。記載該博、文辭豐贍、當今の時、麟の角なるかな。其中に疑ふ可き者あり。皇某皇某とは、是れ何の言ぞや。老兄は一代の名儒、壯中の巨擘、世の矜式する所、言は則ち法と爲る、駟も舌に及ばず。弟嘗て謂ふ大東宇宙に超ゆる者三、開國以來、一姓君と爲る、載籍記せざる所也。周二分を有し、人に服す。稱して至德と爲す。今や天下を有して臣位を去らず、秦人封建を壞ち、刑名以て治む。堂々たる中國、今に三千年、復た復すること能はず。當今封建周人よりも密にして、

而して仁海隅に浹し。漢以來聞かざる所。此三者實に宇宙に超ゆ。名敎吾輩に存す。老兄の爲めに言はざることを得ず。如何、如何と。

嘗て林祭酒を師とす。此事行狀及墓記に見えず。獨り金華が贈序之を詳にす。曰く、長侯林子の學を慕ひ、而して公侯の貴、出入度あり。則ち其家に朝夕して躬親ら業を肄ふこと能はず。將に次公をして弟子の列に就き、受けて之を傳へしめんとす。次公肯ぜず。慨然として嘆じて曰く、物先生在り、其れ唯我を成す。奈何ぞ人の耦鉏を借り、既にして大穫、富天に在りと謂ひ、擲棄顧みずして可ならんや。而れども人各〻見る所あり。苟くも其の見る所にして爲さば、何ぞ其れ眷〻故を愛し已まず、狐裘にして羔袖、瑕ぞ害あらざらんとして、終薄する所を知る無く、首鼠以て鼎鼎の望を爲さんや。卽ち其の熱を執りて之を溜ひ、一朝にして豹變し、同盟を絕ち載書を焚き、名を佞の師に更へ、青雲自ら致さゞること靡し。人或は特操無しと謂うて、目を側てゝ視、惡聲道路に載るも辭せざる所ならんや。若し其可とする所を可とせば、君命も聽かざる所なり、涅めども緇まず。正を得難れて斯れ已まん。或は其の親を負うて逃れ、海濱に遵つて處り、販築屠釣、猶奴婢自ら侮り、睨起子性の如く、百役是れ奉ぜずといふこと無く、嗟來して飽き、夏畦して安んじ、身を沒して爲すこと無き者に愈らざらんか。則ち之を物先生に謀る。先生曰く。蹔次公君亡きの國あらば可也、而も父母の在るあり、區々の節、已を潔うして名に近づくも、大義を如何せんのみ。君子豈に匹夫匹婦の諒を以て爲さんや。父母の在るありて、君亡きの國あらば可也と。次公愕然として且つ慟れ且つ泣き、遂に君命を奉ずと云ふ。

紫芝園漫筆に曰く、古人の絕句、耳に入りて能く人をして誦を成さしむる者あり。宋延清邨山、賀季眞同卿の偶書の如き是れ也。物先生君彝が函嶺に遊ぶを送りて曰く。「昨日晁郎藥を採りて還る、井邑今日又山に遊ぶ、山中の芝草知りぬ長短、玉笥流雲重巒す可し」と。近日縣次公、子和が參州に之くを送りて曰く、「唱ふことを休めよ陽關三疊の詞、陽關三疊悲みに勝へず、君を送る多馬河邊の柳、折つて南枝より北枝に至る」と。亦皆誦を成し易きなり。

五五 平金華

〔平玄中、字は子和、小字は源右衛門、金華と號し、文莊と私謚す。始は平野、修めて平氏と爲す。陸奥の人、守山侯に仕ふ。〕

金華器宇偉然、才鋒儕輩に出づ。徂徠に學び、修辭に閑らふ。家素より貧窶、書を聚むること能はず、架上唯左傳、禮記、莊子、通鑑の撮抄數卷あるのみ。其將に文を屬せんとするや、必ず先づ之を見ること數遍、而して後に筆を下す。

少にして曠達、一世を侮弄す。官に服して倘縱任拘らず。侯家嘗て令を布いて曰く、佳節君に見ゆる者、宜しく新衣を用ふ可し、垢衣を禁ずと。而して金華其妻の衣を著けて出づ。吏尤めて曰く、前に布く所の令、要は君を敬するに在るのみ、然るに子は男女衣裳を同うす、是れ何の禮ぞやと。金華從容として曰く、薄祿の小臣、家貧にして新衣を給すること能はず、而して令は犯す可からず、幸に判妻一衣の稍〻華なる有り、以て罪戾を免るゝを得んと。事侯に聞え、即日祿數石を加賜す。

嘗て徂徠と同じく墨多河に泛ぶ。問うて曰く、吉原の倡家知らず東か西かと。徂徠東方を指示して曰く、江上に長堤あり、日本堤と名づく、所謂吉原の妓樓は其堤下に在る也と。金華笑つて曰く、先生の妄言、惟に文字上のみならず、地理に於ても亦能く妄言すと。

金華一妾一僕を有す。妾の名は月小夜、僕の名は染之助。又、貓を愛すること甚しとなす。其蓄ふ所莽息して十八頭に至る。

紫芝園漫筆に載す。一日余平子和と語りて天文に及ぶ。子和曰く、吾星を識らず、唯北斗と明星とを識るのみと。余曰く、北斗信に子は之を識るか、其所謂明星は、果して是れ太白か、是れ歲星を以て明星と爲すなからんかと。子和笑つて曰く、吾眞の明星を識らざるなりと。

金華の書を春璽に與ふるや、每に自ら老と稱す。春璽以て非禮と爲し、數〻書を貽りて之を責む。而も金華改めず。春璽が書に云く、足下純に書牘を與ふる每に、自ら愚老と稱す。老は尊稱也。故に先生上者を呼んで老と曰ふは禮也。若し自稱して老と曰ふは、齒を以て人に高ぶる倨傲の辭也。故に門人小子と言ふ、或は時に之を以て自稱するのみ。其朋友に於ては己が年彼より長ずと雖も、然かも猶自稱して弟と曰ふは亦禮也。先賢の行ふ所は見る可し。純不才と雖も、未だ質を足下に委せず、且つ犬馬の年も亦足下の先に在り。足下純と言ふ、宜しく自稱して老と曰ふべからず。純に於ては尙可也、若し他人と此くの如くば、必ず足下を禮を知らずと謂はん。純竊に足下の爲めに恥づと。又、書して云く、抑〻足下純を以て無稽の言を出し、以て足下を欺くと爲すか。請ふ復之を言はん。禮に恒言老を稱せず、鄭康成以て敬を廣むと爲す。夫れ老を稱せざるを以て敬を廣むと爲す。則ち老を稱する不敬と爲す知る可し。古は大夫七十にして事を致す、若し謝を得ざれば、則ち必ず之に几杖を賜ふ。

行役に婦人を以てし、四方に適くに安車に乘じて、自稱して老夫と曰ふ。然らば則ち古時大夫年未だ七十ならずば、且つ猶老を稱するを得ず、況んや其下をや。今足下未だ始衰に及ばずして自稱して老と曰ふ、豈に太だ早からずや。純の見る所此くの如し。是を以て前書に云ふあり。足下若し以て然らずと爲さば、則ち盍ぞ答書以て之を辨ぜざる。純不敏と雖も、特に拜して教を受けんとす。今足下然らず、特に一壁を致謝するのみ。則ち其悅ばれざるや明けし。純其間を知らず。故に茲に復請ふ、足下若し我れ仲尼の徒に非ず、何ぞ禮法を以て爲さんと曰はゞ、則ち純の知る所に非ざるなりと。

南郭が送序に曰く、嘗て相與に東山に登る、亘望數十里、邑屋墓樹相屬す。而して子和之に臨み、飄然として心已に一世を蔑視す。乃ち顧みて余に謂つて曰く、寥々として明ゆる無きかな、我をして頓に自愛の心を生ぜしむと。凡そ其大言自稱は、率れ此類也。

金華の文章は、尤も其の自稱する所也。徂徠稱す、古の狂簡吾れ栽する所無しと。此れ徂徠寬大にして才を愛す。稱譽每に其實に過ぐる者也。宇士新痛く金華の文を斥け、嘗て金華稿刪を著し、名公四序評の後に附して印行す。

金華酒を好みて痛飲す。徂徠其の三河に之くを送るの序に曰く、子和酒を飲み傲睨深く伯倫、背逮

の人と爲りを慕ふと。紫芝園漫筆に曰く、何充善く飲む、劉惔常に云ふ、何次道が酒を飲むを見るに、人をして家釀を傾けんと欲せしむと。予平子和に於て亦云ふと。南郭墓に記して曰く、酒を飲みて忼慨し、時に或は激烈泣下るに至ると。

五六　鳴錦江

〔鳴鳳卿、一の名は信遍、字は歸德、又の字は子陽、成島氏。成鳴倭讀同じ、故に假修して鳴氏と爲す。道筑と稱し、錦江と號す。又、芙蓉道人と號す。陸奥の人。大府に仕ふ。〕

錦江、本姓は平井氏、陸奥の白河に生る。幼にして江戸に來り、十七歳のとき成島道雪といふ者の嗣と爲る。性學を好み徂徠の說を悅ぶ。乃ち其徒と周旋す、一時著稱あり。成島氏は大府に仕へて坊主たり。錦江其職を襲ぐ。元文二年同朋の班に晉む。其人と爲りに至つては、則ち南郭の贈序あり、以て其概を想ふに足る。曰く、歸德は朔北の產、人と爲り弘毅、志節概を尙ふ。而して又倜儻俠廓の士と相親善す。俠少年の邑居に居る者と雖も、苟くも義氣若くは才能ある者は、必ず憮して之を愛す、用ひて其力を盡さしむ。躬も亦專ら公に奉ずるを以て志を立つ。人の善言を聞き、若くは奇策ある者

を見ては、乃ち身を傾けて之を引薦し、唯恐らくは後れんことを。冀くは以て國家の用に供せんと。前後之に由つて拔れて良吏と爲り績を致すとあり。歸德恒に言ふ、世の學を好む、談玄にして餘りありと雖も、何ぞ吾が縣官の務に益あらんや、尙なるかな古聖人の治、今豈猶以て之を行ふ可からざる者と爲さんやと。誠に其言に味あり。故に奇策良吏の才ある者之を聞いて、時に試みて施し行ふ、頗る効ありと云ふ。是れ歸德の餘事也。歸德既に自ら勤力を竭すを以て達す。亦盛世の明試する所と雖も、其忠誠公に奉ずるに非ずんば、何を以て此に至らんや。則ち士は以て弘毅ならざる可からざる者か。

錦江は享保の間に方つて禮記、明律を侍講し、寵遇日に厚く、十三經、二十一史を賜ふ。其餘恩準の書甚だ多し。自ら芙蓉樓の記を作りて曰く、辛亥の冬、余一小樓を江上に架し、之を顏して芙蓉と曰ふ、以て藏書の所となす。芙蓉の名は何に取るか、諸を芙蓉軒に當るに取る也。芙蓉相距ること實に三百餘里、而して坐ながら三峰の雪を挹る者、其高にして且つ秀なれば也。樓は何に由つて起る、蓋し家に賜書千餘卷あり、帷房幽涸の地に辱めんことを恐る、此れ樓の起る所云々と。

錦江は又倭歌を善くし、冷泉公より傳ふ。其集の名をみよのなみと曰ふ、三代波を言ふ也。蓋し泉

家三代の點定を歷る、故に、以て名づくと云ふ。「おもへども、ひとのわざには、かぎりあり、ちからをそへよ、あめつちのかみ」。「すぐなるを、まもるときけば、なにごとも、かみにまかする、みこそやすけれ」。此二首嘗て自書して信濃飯田の人某に與ふ。偶々狐に憑らるゝ者あり、三年にして去らず、某乃ち斯歌を誦す。狐即ち去る。此狐後に又、江戸本所石原の商家の女に憑り、自ら太だ錦江の歌を畏るゝを陳す。

元文二年、金輪寺の住持宥諭、命を奉じて碑を飛鳥邱に立つ。錦江代つて撰文并に書す。人往いて之を觀る者多し。後搨裝して帖と作し、傳へて奇賞を爲す。遂に轉じて　櫻町天皇の乙覽を歷ると云ふ。

相模酒勾川、歲々漲流して患を爲す。官吏之を治めて功無し。田中丘隅、字は喜古、武藏川崎の人也。錦江嘗て一たび見、即ち其常人に非ざるを察し、遂に薦めて酒勾を治めしむ。果して績を底す。乃ち其東西に堤し、名づけて文命と曰ふ、碑を立てゝ以て事を紀す。錦江喜古に代つて文を作る。享保十四年喜古沒す。錦江又其墓記を撰す。

芙蓉樓集は家に藏して未だ刊布せず。余嘗て之を借覽するに、卷帙頗る浩瀚たり。廣く時彥に交る。

錦江職に在ること五十餘年、一日も直を闕かずと傳に見ゆ。而して餘暇の撰著此くの如し。常人の及ばざる所なり。

荻正卿に復する書に曰く、老禿今年七十有二歳、肉斤酒斗、歩走飛ぶが如しと。此れ寶歴十年春の事たり。嗚呼老健の賴むに足らざるや。是歳九月十九日沒す。友人入江南溟傳を作る。墓は江戸本所の本法寺に在り。

五七　岡龍洲

〔岡白駒、字は千里、小字は太仲、龍洲と號す。播磨の人。蓮池侯に仕ふ。〕

龍洲少時、播磨より摂津に徙り、醫を以て業と爲す。京に徙るに及び、業を改めて儒と爲る。晩年蓮池侯の徵に應じ、文教を掌る。其志經を治むるに在り。頗る文章を善くす。又、小說俗語に通じ、名聲一時に藉甚たり。蛻巖が答書に曰く、足下は關西の古學、聾園を待たずして興る者、時賢に比すれば臭味自ら別る。問はずして其の肯て苟も交らざるを知る。又、赤松國鑾の劉文翼に與ふる書に曰く、平安の文學に於ける其由來尙し。然れども今を以て之を觀る、東都の盛に及ばざる遠きこと出し。乃ち名下果して虛士無しと稱するに足る者、唯岡千里一人、其他は彭々憔々、要するに亦春秋に義戰なしと。

龍洲嘗て書商に過り、新鐫の春臺が增註孔子家語を見る。卽ち以爲へらく我更に詩を作りて之を壓倒せんと。乃ち商に謂つて曰く、德失其學固より淺し、今此註を見るに果して舛誤多し。吾嘗て註解を作り、將に世の爲に梓に鋟せんとすと。已に歸つて初めて筆を乘り補註を作る。

南郭が校刻する所の蒙求、當時盛んに世に行はる、龍洲箋註を作り、乃ち以て南郭を壓せんと欲す。故に其例言に恣に南郭の校本を詆訾して曰く、舊本誤謬多し、近歳の刻本改正と稱するも、而も十纔に一二のみ。又曰く、蒙求襲する所正史の外に出づる者あり。謝承が後漢書、王隱が晉書の如く、其事多く世說の劉義慶が註に見ゆ。新刻本は世說の註に據り、舊本の文を刪落す。殊に知らず、世說は風旨を片言隻語に取る、故に引證する所亦其要を掇り、其事を簡省す。蒙求は卽ち事實詳なるを主と爲す、李良が所謂注下に敷演する者、卽ち是れのみ。豈に刪落す可けんや。今舊本に仍つて之を補ひ、以て其舊に復すと。又、曰く新刻本の考例に云く、文獻通考藝文の部に蒙求三卷を載すと。按ずるに文獻通考に、藝文の部無し。經籍考小學の部に、蒙求を載す。是れ未だ其書を睹ず。而して杜撰引證

す、其考ふる所も亦知る可きのみと。

龍洲に著書甚だ多し。詩經毛傳補義は詩を治むる者以て便と爲す。近時縄温卿之を稱して曰く、龍洲が著述中に就き尤も善と爲す。孟子解は、男子龍龍洲が孟子を駁するの言を錄して序と爲す。又、其解中に、掊擊餘力を遺さず。此れ解にして刺を兼ぬる者也。老傳、荀子、史記、世說四部の觸は謬妄臆說多し。世乃ち謂うて白駒が失孤石栗と爲す。四の音は失。觸は此に孤石栗と譯す。俗に過失を謂うて失孤石栗と爲す。

龍洲性褊急、其使令を受くる者、毎に堪へざらんとす。獨り門人加島宗叔といふ者、能く龍洲の意を得。龍洲も亦能く己を折つて、宗叔が言を用ふ。是を以て家人動もすれば宗叔に詣つて請ふ。

吾祖の過庭紀談に曰く、僧其道を修め、又、詩文若くは書畫諸々の技藝を爲す。之を書して禪餘の暇某々の事を爲すと曰ふ。是れ禪寂澄心は卽ち禪也。其禪の外經論を究むるを以て餘と爲す。故に禪餘の暇とは、禪と餘と二者の暇也。京師の一先生、釋大潮が西溟餘稿に序して曰く、禪の餘暇、深く斯文を嗜むと。此れ禪餘の餘を以て餘暇と爲す也。一噱を發す可しと。所謂一先生とは龍洲を謂ふ也。熙朝文苑に龍洲の關皐君が寄するに酬ゆる詩二首を載す。此外絶えて其詩を睹ず。因つて此に表出

す。曰はく、「車を驅つて東路に向ふ、東路遠くして且つ長し、悲風何ぞ蕭々たる、颯として我が衣裳を吹く、轡を攬つて正に徘徊し、衣を披て高岡に登る、中原に佳人あり、意思凡常ならず、琴を鳴らせば白雪飛び、笙を吹けば青雲翔る、大雅久しく明えず、逸響初めて飄揚す、此會再び遭ひ難し、離別す天の一方、遊子佳人を懷ふ、何を以てか我が腸を慰めん、恨々として長に嘆息す、車輪中腸を轉ず、願くは雙羽翼を得て、高飛君が側に在らん」と。其二に、「扁舟嘗て興に乘ず、五燁粲城を照らし、沈醉黃金盡き、狂歌白雪清く、文章落魄を憐れみ、詞賦豪英を論ず、海內誰か畏友、中原君を數ふるに堪へたり」と。

日本詩史、龍洲に於ける頗る之を貶駁す。然して亦其豪爽にして人の籬下に立たざるを表す。具論たるに似たり。乃ち左に記す。千里初め攝の西宮邑に在り、醫を以て業と爲す。一旦刀圭を投じて京師に來り、專ら儒を以て行ふ。是時京師已に傳奇小說を悅ぶ者あり。千里兼れて其說を唱ふ。都下翠然として之を傳ふ。其名一時に躁す。千里是に於て復た詩を作らず。人或は詩を乞へば、則ち辭するに不能を以てす。是に於て人々謂ふ、千里は文にして詩ならずと。其實は非也。余千里が播磨に在る時の作を覽るに、亦自ら當に行はるべし。爾か云ふ所以は、說あり。千里名に急にして、又、人に

勝つことを好む。是時東都に服子遷あり、赤石に梁景鸞あり、南紀に祇伯玉あり、詩名海内に聞ゆ。千里自ら量るに此數子と並び馳せ難し。而して世方に復古の業を勤む、左、國、史、漢は人々之を誦す、其訓詁に託するも、亦不朽たるに足れりと。故に詩を廢して專意諸態を作りて、其名を網羅す。既にして後人の文士を以て己を觀るを恐るゝときは、則ち詩、書、論、孟を傳註して、其名を崇うす。然れども已に名に急にして、又、人に勝つことを好む。故に其論說する所、引證精しからず。且つ臆見を以て疑義を勇斷し、或は他人の說を剽襲して、以て其著作と爲す。快を一時に取ると雖も、識者の指摘を免れ難し。余千里の爲めに深く之を惜むと云ふ。

五八　餘熊耳

〔餘承裕、字は子綽、大内氏、小字は忠大夫、熊耳と號す。陸奥の人。唐津侯に仕ふ。〕

熊耳は陸奥の三春熊耳村に生る。兒たりし時より學を嗜む。年十七のとき、笈を負うて江戸に來り、秋子帥に就いて業を問ふ。乃ち子帥に介して徂徠に謁す。既にして京に到り東涯に見ゆ。遂に長崎に赴き留つて講業す。是時始めて李滄溟集を見て大に喜び、即ち自ら全部を謄寫し、日に以て諷誦す。

居ること十年、去つて復た江戸に來り、淺草に教授す。是に於て名聲藉甚。奇を問ふ者日に其門に踵る。何も亡くして召されて唐津侯の文學と爲る。

熊耳は俗事に於て、一切姓大内を稱し、文に臨むに至つては則ち餘を稱す。自ら言ふ其先は百濟明帝の太子餘琳より出づ、故に餘を以て本姓と爲すと。竹雨齋といふ者あり、亦餘姓也。桐原玄輔其墓に記して曰く、按ずるに馬韓國、餘璋王の太子琳聖、海に航して歸化す、推古天皇周防多々良に館す。琳聖七世の孫を正恒と曰ふ、姓多々良を賜ひ、大内と號す。其後子孫遂に大内を以て氏と爲す。餘璋王の事は東涯の秉燭談に之を載す、其說に云く、日本紀の所謂餘豐璋は、唐書に扶餘豐と曰ふ、此れ璋は其祖武王の名、扶餘は百濟の氏、今世以て百濟の餘章王と爲すは誤れりと。知らず餘姓を稱する者、未だ之を攷ふるに及ばざるか、將た或は修めて餘と爲すかと。

熊耳は徂徠の學を慕ひ、尤も工みに古文辭を修む。時人以て當今の于鱗と爲す。南郭屢〻稱して曰く、熊耳は文章に於て滄溟に刻意す、故に殆んど之に肖たり。方今筆を秉つて李に擬する者甚だ衆し、而かも皆及ぶ能はざる也と。

熊耳は南郭に於て、贄を執らずと雖も毎に其誨督を承く。文章尤も南郭の刪潤を得て長進す。故に

其集中南郭に於ては必ず之を推尊し、先生を以て之を稱す

五九　藤原蘭林

〔藤原明遠、字は深藏、中村氏、蘭林と號し、又、盈進齋と號す。江戸の人。大府に仕ふ。〕

蘭林は初め玄春と稱し、父玄悅を承けて醫官たり。乃ち能く其業を修む。著す所醫方綱紀三卷あり。博學にして親はざる所なし。延享四年正月十九日、醫を改めて儒員に撰でらる。時に年五十一。蓋し國初以降、醫よりして職を轉ずる蘭林一人と云ふ。鳴鶴德が芙蓉樓集に、蘭林が儒官と爲るを賀する の序あり。曰く、滕先生曩官方技、死を起し骨に肉す、聲東方に振ふ、最も經術文學を喜び、一日匙を釋てゝ歎じて曰く、士君子世を濟ふ、奚ぞ翹艸根樹皮ならんや、嗚呼軒、岐遐たり、扁、倉古し、肘後載籍、叔世滋〻博し、汎乎として要寡し、若し乃ち天人を合同し、及び物を知るの明、安くに適として今の世に施さんや、生命も亦大、一たび肱を折るを失はゞ、則ち駟も亦及ばず、已んぬるかな、已んぬるかな、是に於てか復醫藥に從事せず、蜘蛛藥籠に網す。乃ち上言して儒官たらんと請ふ、報ぜられず、居ること數年、入りて侍醫を以て經筵の事を行ふ。則ち特恩と雖も、其志に非ざる也。丁

卯の春正月、定て爵を侍講に降し、束髮衣冠、禮に從事す、是に於てか先生の喜び知る可き也と。

蘭林讀書力を極めて撮抄す。其著はす所多くは抄を積んで編を爲す者なり。然るに皆統紀體裁あり 學山錄の若き、尤も常儒の及ぶ所に非ざるなり。識者稱して唐土の人に愧ぢずと爲す。

蘭林は鳩巢の門に出づ。而して博學精密は、世以て寒水青藍と爲す。蘭林は宋學を奉ずる者と雖も、鳩巢の宋說に於ける、毫も疑を容れざるが如きに非ず。寛延元年、韓使來聘す。蘭林之と筆語す。朱子を議する者甚だ多し。彼れ足下の論は乃ち伊藤氏に誤られたる耶らんや。伊藤氏貴邦に於ては豪傑の士と謂ふ可し、而して聖學の工夫に於ける、大に謬戾あり、足下果して之を知るかと曰ふに至る。其朱子を議する略に曰く、朱子の諸經傳註、亦最も精密を窮め復た餘蘊なしと雖も、然れども或は冒は古訓に違ひ、義は古意を失する者、未だ必ずしも無しと爲さず。大抵性命道德の間に於ては諸を高遠に失する者あり、是を以て僕朱子の解に於て、亦間然無きこと能はずと。又曰く、僕竊かに謂ふ、凡そ古書を讀む、須らく其時の言辭に通ずべし、蓋し三代の書は、三代の言辭氣象あり。漢魏の書は、漢魏の言辭氣象あり。苟くも其然る所を知らざれば、則ち說き得て當ると雖も、或は其言意に畔く者あり、今姑く歷史を以て之を言はんに、兩漢史の言ふ所は、六朝史と同じからず。六朝史の言ふ所は

亦唐宋史と同じからず。蓋し言辭の道は、時と升降す。其一ならざるあるも亦自然の勢也。但宋儒は毎毎近言を以て古言を解し、今意を以て古意を解す、是に於て古意に非ざる者、或は之れあり。今明德の一事を以て之を言ふに、朱子は大學に於て、心の虛靈不昧を以て之を說く、其意精妙ならざるに非ず、然りと雖も、諸を古書に證するに、此例無きに似たり。夫れ明德の一語は、尙書、易、詩、左傳等、毎に之を言ふ。而して皆以て以爲らく聖人の道德光輝發輝して物に施す者、而して未だ嘗て心の妙用を以て之を說かざる也。豈に大學の一書、唯別に此意あらんやと、又、實に宋儒體を說くの論、朱註を讀むの論、中庸論を作り、以て韓使に詰問す。其他學山錄、講習餘筆等、往々宋儒の信ず可からざる者あるを載す。

蘭林一意學に耽り、胸中更に世務無し。書を讀まざる者に對すれば、則ち惟寒暄を敍するのみ、絕えて他話無し。故を以て世謂うて癡呆と爲す、

蘭林終りに垂として遊命し、其藏する所の書四十九部を足利學校に寄納す。其意之を永世に傳へて後人の覽に供せんと欲す。其目左の如し。漢魏叢書、玉海、杜氏通典、明文翼運、吳臨川集、名山藏詳節、唐文粹、皇朝類苑、自警編、餘冬序錄、呂氏春秋、後山叢談、東國史畧、石林燕語、周禮訓

僖、讀書管見、經籍會通、六經奧論、千百年眼、江關筆談、南島志、蝦夷志、東雅、唐律疏議、古今餘材抄、湖亭涉筆、異稱日本傳、周易翼傳、易翼傳、周易集解、皇王大紀、事纂、羅豫章集、學齋佔畢、鼠璞、大極圖述、唐國史補、大學衍義、閒窓雜錄、寓意錄、群籍綜言、老學菴筆記、孫可之文錄、李習之文集、曲洧舊聞、創業起居註、書疑、考工記解、禹貢論。

蘭林の墓は谷中玉林寺に在り。小石碑の正面に鐫題して曰く、蘭林藤原明遠之墓と。左側に曰く、寶曆十一年辛巳、九月三日と。其勒する所僅に此れのみ。此れ蓋し蘭林の遺意也。蘭林墓石は惟其姓名生卒を記するを以て足れりと爲し、言行を記するが如きは、謂つて浮華の事と爲す。其說學山錄及講習餘筆に見ゆ。

六〇 宇明霞軒

〔宇鼎、字は士新、小字は三平、明霞軒と號す。本姓は宇野、裁して宇氏と爲す。平安の人。〕

士新の父安治は、角倉與市に屬して運漕を司る。士新少より榮利を屣脫し、意を載籍に潛む。始め章句を向井滄洲名は三省、字は子魯に受け、後師承する所無し。弟士則と共に發憤自ら奮ひ、遂に海

内の文柄を持す。其の著す所の論語考、最も大に力ありと爲す。士新固より時輩と伍を爲さず、其學將に精究して曠世ならんとす。是に於て門を杜ち軌を掃ひ、切磋甚だ勤む。釋大典が書燈の記に曰く、太田見良嘗て宇先生に謂つて曰く、このごろ歲儉にして米貴し、吾れと君等と尤も病む所也と。先生曰く、吁一掬の米は以て日を并せて餓ゑざる可し、抑も何の病む所ぞ、但米貴ければ物之に從ふ、乃ち油をして貴からしむ。是れ吾が獨り病む所也と。先生の志、是に於てか知る可きのみと。

士新刻厲して書を讀み、足戸閾を踰えざること十有餘年。時人之が爲めに語つて曰く、都下見ざる者三あり、宇野三平が市に至るを見ず、香川太沖が病を治するを見ず、谷左中が文を作るを見ずと。

士新は李、王を奉じて古文辭を善くす、然れども徂徠、南郭が輩の作る所と其趣を殊にす。初め大潮が指授を得たり。其の田文瑟に復する書に曰く、僕始めて文を學ぶ嘗て潮公に就いて正す。今に於て之を思ふに、其刪潤皆當れり。世儒の體を辨ぜず、格を論ぜず、金を點して鐵と爲し、夏を變じて夷と爲す者の若きに非ずと。大潮亦嘗て士新の文を稱して、元美の髓を得たりと爲す。夫れ大潮の文は既に海内に名あり。而して近時又大典、能文を以て一時に聞ゆ。此二釋は緇林に泰斗たるは論なし。之を操觚者流に求むるも、亦得易からざる也。而して一は則ち士新に傳へ、一は則ち士新に受く。

姓氏解二卷、古今を綜理し、倭漢を考覈し、姓氏の一事に於て殆んど餘蘊なし。而して其卷首に作者の名姓を題署せざるは、此れ士新の深意にして、蓋し古國字を以て書する者に倣ふ也。（說は吾祖過庭紀談に詳なり）然るに近時京師の人、松本愼といふ者、近江宇鼎士新著の七字を以て蓋板の卷首に攙入し、且つ之が序を作りて、其複姓を修めて單姓と爲すは是に非ざるの論を附し、大に士新の意を失す。

人の後と爲つて其姓を承くるは、士新以て非と爲す。一日江村某至る。此人他姓を冒す。問うて曰く、大人は先生の實父なるや不やと。士新毅然として曰く、吾家の父は始めより虛實あらずと。

士新上杉謙信が傳を撰す。偶然と雖も其立志創業士新の之に髣髴たる者あり。夫れ謙信は戰國の際に生れて、少より内を御せず。天資曉勇にして、兵勢大に奮ひ、將に以て保、平以降の亂を撥めて、更に霸業を立てんとす。而も年四十九にして、功成らずして卒す。然れども世皆其力の必ずしも信長秀吉に減ぜざるを知る。士新は韓藥の世に生れて、未だ嘗て妻妾を置かず、志厚く氣邁え、强學人に越ゆ。將に以て漢魏以來の諸說を統べ、別に一家を立てんとす。而して年四十八にして、志酬いられずして沒す。然れども世皆其學の必しも仁齋、徂徠に讓らざるを知る。

士新の徂徠に於けるや、論語を著して痛く其謬語を糾し、或は是の如きは果して孔子の罪人也、先王の罪人也、天下の罪人也と謂ふに至る。他に辨を作つて春秋の説を擊ち、名公四序評を作りて文章を彈す。春臺が斥非に曰く、三平自ら其才氣を負ひ、而して別に意見を立て、以て徂徠に勝たんことを求む。其果して能く徂徠に勝つは則ち知らざる也。余恐る三平の徂徠に勝つは、適に其の自ら卑下する所以なりと。士新の徂徠を駁すること此の如し、然れども其實は徂徠に心酔す。是を以て其沒するや、祭文哭詩を作りて之を褒揚す。杉以成既に以て過稱と爲せり。士新書を與へて曰く、僕の物子を稱す、未だ敢て其實に過ぎず、庸何ぞ病まん。物子の自負する所は經術也。其文固より未だ濟南に及ばず、余も亦之に過ぎたりと謂はず、然れども經術文章相兼ぬ、彼も亦未だ及ばざる所あり。則ち不佞の稱する所何の過ぎたること之れあらんと。又、芥彥章に與ふる書に曰く、夫れ物夫子は實に東方開闢の一人、其の華夏に在るも亦其比を難ず、而して陪臣を以て散職に居る、何ぞ華夏を論ぜん、即ち國中に在り、兒童に君實たらず、走卒に司馬たらず、又、未だ學者に泰斗たらず、晩に乃ち稍〻仰がる。然れども矮人場を觀る、未だ實に知者あらず。是れ夫の富士の僻と其の不幸たる、豈に余が病の比ならんや。然りと雖も、是れ何ぞ論ずるに足らん、是れ何ぞ論ずるに足らん、其の發憤を爲す所、

乃ち藻を擒へて天庭に揆ぶ、傳施する所測る可からざる也と。又、玄海上人に與ふる書に曰く、謂ふ洛の諸山叡、宕最も秀づ、僕の兄弟之に比す、他人は則ち諸山たりと。又、謂ふ僕兄弟富士を稱すと雖も、唯叡は庶幾す可し、而して未だ絕頂に到らず、僕の志す所固より近小ならず。而して今の得る所、諸を山に登るに辟ふるに倘其足に在り、曾て未だ半に到らず、何ぞ絕頂を論ぜん。而して叡は又願ふ所に非ざる也。富士の若きは則ち物先生に非ざれば能く當ること莫し。我翟物先生の故を以て常に之を稱するのみ、固より敢て期せざる所、而して亦願ふ所に非ざる也と。

南郭の了願師に答ふる書に曰く、二子は固に得難きの才也。熊耳が小野孟鉉を送る序に曰はく、古學父子は、國家右文の化に應じ、踵を繼いで起つ。宇氏兄弟は、大業復古の運に乘じ、雁行して漸み、一時を風靡して、戰國五百年斯文の抑鬱を雪ぐ。即ち亦一振と謂ふ可き也と。蓋し人の好惡は各〻異なり、是非互に議す、要は公論を待つ可きのみ。原田東岳の士新を視ること甚た卑し。東岳筆嚼に曰く、徂徠、東涯二先生は西也。而して徂徠は堂に在り、東涯は室に在り。南郭、春臺二子は西也、而して南郭は戸に在り。春臺は門に在り、蘭嶠、周南二子は西也、而して偕に廊廡の下に在り。金華、士新二子は西也、而して偕に門牆を窺つて未だ入ること能はず、宇氏最も等の劣れる者也と。筆嚼に

又曰く、士新妄りに其酉洞博覧を誇りて、自ら其執拗撩掇を知らず。旗幟を建てゝ勝を徂徠先生に取らんと欲し、多く群書を引いて論語考を著す。然れども其説泛然として適從する所なし。華人經に於て傳註を爲る者、古今甚だ多し、而して此の如き者未だ嘗て之れあらざる也。其文大氐霑潤舒暢を欠く。故に其綴緝結構する所の者、所謂樗櫪殺接是れ古文辭を謬り擬する也、豈に哀しからずや。明霞遺稿の如き、識者之れを駁す。則ち徂徠先生に及ばざること遠きこと甚しと。

明霞遺稿に載す、澤邨琴所が墓銘の敍に、野子曖以て文辭佳ならずと爲し、改撰して琴所刪稿に附す。其後に書して云く、先生の沒するや、門人前島當完等、其の遺せる事行を狀し、以て墓碑に銘することを平安の宇先生に乞ふ。後七年、宇先生病んで、且に沒せんとし、其文乃ち成る。其門人片徽猷に遺命して、淨寫して諸を當完の所に致す、余受けて之を讀むに、銘辭流暢誦す可し、其敍文に至りては則ち蕪なること甚し、蓋し其終りに臨みて門人に口授し、門人受けて之を經紀し、蠹く其意の如くなる能はざるを以ての故に、此鹵莽を致すのみ。今茲將に稿刪を木せんとするや、同志の士之を附刻せんと欲し、乃ち相共に議して其敍文を去る、但銘の以て孤行す可からざるを以てや、其敍中の數語を節取し、以て諸を其端に弁して、以て一篇の文を具ふと云ふ。

我先友天履仁、人と爲り寡欲にして、世味に泊如たり。惟肘の案を離れざるを以て、人間の至樂と爲す、而して甚だ吾祖と宇氏兄弟とを慕ひ、其著書は皆自ら珍藏して、稱して口を容れず、論語考の里仁より雍也に至る三卷、上梓も亦履仁の手に成る。

六一　宇士朗

〔宇鑾、字は士茹、改字は士朗、小字は兵介。士新の弟。平安の人。〕

士朗と士新とは友愛篤至にして、其學の充實相讓らず、世に平安の二宇先生と稱す。而して年僅かに三十一、士新に先ちて卒す。嗟天少しく年を假さば、其樹立當に量る可からざるべし。士新遺稿に序して云く、余士朗と同じく學ぶこと十餘年、而して自ら成る所を顧みるに、曾て未だ士朗の如くなる能はず、士朗誠に才あるかな。且つ余は疾を以ての故に、思慮を省き精神を一にし、觚を操らざること久し、則ち其の余に先つこと翩々固に宜にして、而して先だつべからざる者の先だつは、獨り何ぞやと。

嘗て江戸に來り駿園の社に入り、周南、南郭、金華の輩と相交り、何も無くして京に歸る。徂徠贈

言あり季子を贈るの序是れ也。春壑が斥非に曰く、兵介嘗て東都に遊び、我徂徠先生に從つて古文辭を學ぶ。既にして平安に歸りて、之に呻き、其兄と俱に徂徠を非ると。此れ言の過激なるもの、士期必ずしも然らず、其大潮師に與ふる書に曰く、夫れ物翁は當世の龍門、四方の士其門に踵る者何ぞ限らん、而して翁容れずして曰く、我れを溷すことを爲すなかれと、卽ひ之を容るゝも再三往かざれば見ることを獲ず、卽ひ見ることを獲るも、亦必ずしも其提誨を得ずと云ふ。鑑の謁を取る、翁方に客を會して筮を炙す、輒ち鑑を呼び入れて之に坐を命じ、而して又、之に食を命じ、遂に二三子の後に從はしむ。我を博し我を約し、其兩端を叩いて竭くす。鑑は鄙人也、才性駑下、何を以て翁に此れあるや、則ち惟師の故愛屋烏に及ぶのみと。又、玄海師に與ふる書に曰く、文、豈に言ひ易からんや、古今を綜該し、天地を包羅し、然る後に得たりと爲す也。今其人を求むるに、海內の大にして、一の物先生在りと。

芥彥章が丹丘詩話に曰く、絕句の義、迄に定義なし、近體首尾或は中二聯を裁すと謂ふも、恐らくば憑るに足らず。吾友宇士期謂ふ、絕句は一句一絕を謂ふ、律詩は句々聯排なるも、絕句は然らず、故に絕句は律詩に對するの稱のみと。此說明白にして據る可し、古人未だ曾て言及せず。

六二　秋山玉山

〔秋山儀、字は子羽、小字は儀右衛門、玉山と號す。肥後の人。國侯に仕ふ。〕

玉山世〻本藩に祿す。秋山需菴といふ者、玉山の從父たり、扁、倉の術を以て亦俸を受く。玉山出でて之が後たり。早く其技を習ひ、又少より學を好み、博く羣籍を覽ひ、其の發明する所は、宿學皆驚歎す。是に於て侯命じて更に他子を發ひて醫を嗣がしめ、玉山をして一に儒學を爲さしむ。乃ち江戸に來り、祭酒林凰岡先生に從ふ、先生其才學を奇愛し、講說の日已疾病あるに方つては、則ち玉山をして代らしむ。之を久うして業大に進み、其國に歸るや、贄を執つて門に及ぶ者千に踰ゆと云ふ。

寶曆乙亥、熊本新に時習館を剏む。是れ玉山の建議の興す所也。玉山乃ち之が提學と爲り、學規十三則を揭げ、俊才を薦めて子弟を敎ふ。是に於て藩中斐然として化に嚮ふ。岩諒齋に復する書に曰く、廟學の命新に下る、以て菊池氏の廢を興すに足る、是れ則ち不佞の涓埃我公に報ぜんことを圖る所以なりと。又越子聰に復する書に曰く、敝邑菊池氏の時、蓋し始めて學を建つ。加藤氏に至るに及んでや、荒廢修めず、絃誦久しく熄む。加藤氏亡して國除かる。未だ幾くならずして我先公實に茅土の封

を享けて入つて立つ。五世にして今公に及ぶ、儒教を尊信し、學館を再興す、扁して時習と曰ふ、臣儀蓋し與つて議ありと。

紀平洲が小語に曰く、肥後の秋山儀子羽、余と親交すること十數年、會飲酣語、是非四應、未だ嘗て一たびも人を拒むの言を聞かずと。又、曰く、子羽外は柔に内は剛、親友に觸髏杯を作る者あり、諸客皆擧ぐ、獨り子羽敢て飲まず、詩を作りて之を諷す。

富士山に登る者、役の小角の法を修め、六月朔より七月二十日に至るを以て、登陟の期と爲す。然るに玉山七月二十一日を以て登る、是日天清く風和ぎ、獨り覽勝を擅にす、遂に富嶽の記あり、其文朗暢人の賞する所也。南郭嘗て稱して曰く、天地に富嶽あり、乃ち始めて此記あり、苟くも神にして文ならずんば則ち已む、翠玉の圓一たび名山に題して、萬古愈々顏色を增す、夫の木華の神の若きは、則ち固より當に粲然として玉齒を啓くべきのみと。

一日古伯彝と劉文翼の所に飲む。玉山謂つて曰く、余伯彝と同じく酒を嗜む。而して伯彝は柳下惠たり、余は則ち伯夷と。蓋し伯彝は善否を問はず、玉山は醇に非らざれば飲まず、故に此言あり。

玉山詩文を以て已に一時に冠冕たり。又、工に字を作る、短章片墨と雖も、人に傳へらる。赤松國

鸞の三上宗順に與ふる書に曰く、秋玉山が詩一首、卽ち其手書する所、詩は固より超乘、書も亦不凡、遺して以て清玩に供す。玉山は海内の一名家、僕嘗て忘年の交を辱うす、今は則ち亡しと。

玉山林門に出でて、交道甚だ廣し。蘐園の徒に於ては、南郭、仲英、蘭亭、鶴齋が輩と、尤も驩を爲す。南郭、蘭亭の沒するや、爲めに詩數首を作つて之を哭す。

六三　青木昆陽

〔青木敦書、字は厚甫、小字は文藏、昆陽と號す。武藏の人、大府に仕ふ。〕

昆陽は初め處士也。其清才好學、早く大岡忠相に知られ、官庫の書を觀ることを賜ふ、乃ち以爲らく草莽の臣、官書を窺ふことを得、古より未だ之れあらざる也、西土と雖も亦然り。皇甫謐自ら表して書一車を借るが如き、蓋し武帝の嗜好を以ての故也、予は大岡公の遇に非ざるよりは、惡ぞ能く此業を爲さんやと。元文已來、大府の命を拜して、典籍の事を管る。後屢々旨を奉じて諸州に到り、梵刹民家に投じ、其舊錄の以て國家の事に徵するに足る者を搜索して、之を進呈す。其著述する所も、亦上らざるは莫し。延享甲子、紅葉山火の番に擧げらる。尋いて評定所備者に改む。終に還つて書

物奉行と爲る。

昆陽は伊藤東涯の門に出で、其學壹に有用に志す、經義文章に於ては必ずしも究思せず、故に堀川の徒に類せざる者の若し。然れども始めより他師あるに非ず、山崎氏社中の劄記(雜話續錄)に青木文藏といふ者、仲邨惕齋に學び、後淺見絅齋を師とする事を載す、此れ同名異人にして、昆陽に非ざる也。

嘗て嘆じて曰く、凡そ罪ありて死刑に非ざる者、遠く之を島嶼に放つ、要は其れをして天年を終らしむるに在るのみ、然るに諸島五穀少なく、常に海產木實を以て食に給す、是を以て往々餓死を免るゝこと能はず、豈に亦痛ましからずや、卽ち種藝の地と雖も、歲の歉なるに遇へば則ち民菜色無きこと能はず、意ふに百穀の外、以て穀に當つ可き者、薯蕷に如くは莫き也と。乃ち官に陳じて種子を薩摩に求め、試みに之を官の藥苑中に種う。則ち極めて蕃衍す。是に於て國字を以て薯蕷考一卷を著して、其培植の法を演べ、官版に鏤し種子を併せて諸島及諸州に行下し、未だ數年ならざるに處として種ゑざるは無し、今に至りて上下之を便とす。歲登らずと雖も、民遑に餓ゑざる者は、實に昆陽の惠無窮に及ぶなり。其墓門の碑に題して甘藷先生の墓と曰ふ、以あるかな。

昆陽の時に當つて、未だ和蘭の學を講ずる者あらず、昆陽獨り以爲らく其說に於て必ず收用す可き者あらんと、而して和蘭の字畫脚蹟行、通解し易からず、是に於て或は長崎に之きて譯者に質し、或は博く其書に攻へ、遂に粗〻了會を獲、近ごろ此學漸く闢く、而かも皆昆陽に本づかざることを得ずと云ふ。大槪玄澤が六物新志に曰く、和蘭學の一塗、白石新井先生に草創し、昆陽青木先生に中興し、蘭化前野先生に休明し、鵠齋杉田先生に隆盛す。故に近時斯に從事する者、皆四先生に淵源せざるは莫し。

昆陽博學洽聞、著書甚だ富む。而して其鋟梓する所の者、惟薯蕷考一卷のみ。餘は皆家に藏す。是を以て世未だ其撰する所何れの書あるかを詳にせざるなり。青木一淸といふ者吾れ之を知る、卽ち昆陽の後たり。因つて遍く遺著を見ることを得たり。乃ち其目を紀す、經濟纂要前集十二卷、後集五卷、續集三卷、官職略記十三卷、刑法國字譯十二卷、昆陽漫錄六卷、續錄一卷、國家食貨略、國家金銀錢譜、答問小錄、奉使小錄、對客夜話、夜話小錄、一夕話、雜集、郡名考、和蘭勸酒哥解、和蘭櫻木一角說、長崎問書、各一卷、和蘭文字畧考三考、和蘭話譯、草廬雜談、各二卷、續草廬雜談一卷。

六四　奥田三角

〔奥田士亨、字は嘉甫、小字は宗四郎、蘭汀と號し、又、南山と號し、又、三角亭と號す。伊勢の人。津侯に仕ふ。〕

三角幼時、表叔柴田蘋洲といふ者に就いて學ぶ。蘋洲嘗て謂つて曰く、書を讀まば宜しく天下第一の人を師となすべし、今の世に當つて、京師の伊藤原藏は、卽ち其人也、汝往いて學ぶ可しと。是に於て卽ち笈を負ひ東涯の門に遊ぶ。親炙すること十年、殆んど其室に入る。乃ち擯でられて津侯に仕へ、謹愼事を勤め、四君に歷事し、五十年未だ嘗て過あらず。侯皆眷注甚だ渥し。老年仕を致す。後時に之を招見し、呼んで先生と曰ふて名いはず。

三角賦質謙讓、年七十七にして、身後に及びて人の諡墓の文を撰ぶことを恐れ、是に於て碣を建て、自ら履歷を紀す。其銘に曰く、「田間に起りて中廳直に升る、何を以て之を得る、稽古の力」と。年三十三のとき父を喪ひ、翌年東涯に訣る。爲めに酒肉を絕ち、心喪を服すること合せて四年。亭の三角と名くるは、兪退翁に倣うて盈るを虧くの戒を存する也。集中に亭の記及詩を載す、詩に

「人間の交際を重んじ、天道の循環は滿虧を醫しむ」の句あり。後偏に物の三角を好み、文房諸具より、百の雜器に至るまで、多く製るに三角を以てすと云ふ。

三角の詩、其誦憶して人に益する者は、食禁の歌也。曰く、「天門赤豆鯉を食ふこと勿れ、葱蒜鼈李鷄子を惡む、瓊菱酢李共に蜜を畏れ、無腸公子梨柿を避く、妊婦は茱萸鯉鱠卵、子薑は瘡を發し枝指を生ず、苦苣は蜜を忌み鱔醋を忌む、魚鱠蓼を用ひ肚裏を傷にす、胡桃と麻姑と鯽と蓄蓼、葱麪鮎魚渾べて雉を犯す、鰻鱧鰍鮮川椒を忌む、楊梅と葱と雀と李と、笋鰕糖を長れ鶏菌を長る、莧鴨と鼈と錡を同じうすることを休めよ、魚目睡あり腹丹字、鳥足伸びざるは是れ自死、鯽魚と糖餅と黄魚と蕎と、一たび犯さば永訣屍紫に變ず」、（醋鱔相犯は食經に載せず、而して余二人の死者を見る、以て廚壁に掲ぐ）

三角集は巾箱本五卷、合せて三册、詩文略諸體あり、而して書牘を缺く。曰く、尺牘の文は固より志すに足らず、事を言ふは直を寶るに似、問に答ふるは智に誇るに嫌ありと。

三角集、文二卷、卷首毎に奥田士亨著すと題す、詩三卷、卷首毎に擯水燕倉著すと題す、擯水燕倉とは何の謂なるを知らざる也。而して近ろ其說を聞くに、伊勢に櫛田川あり、三角の居之に近し、因

つて掩水と曰ふ。而して奥田の反は燕、士亨の反は倫、其見に姓名を署せざる者抑〻故あり。南郭始めて其集の初編を刻するや、入江南溟以爲らく、古人の集は皆死後に及びて人之を傳ふ、其身自ら之を梓に鋟するに至りては笑ふ可きの甚しき也と。乃ち書を三角に通じて之を辨ず、三角答書して南溟に和し、倶に南郭を駁す。既にして世生前に其詩文を鏤する者漸く多く、人も亦稱して盛事と爲す。三角心に之を渓み、遂に自ら其集を刻す。然れども前言を恥ぢ、詩集に至りては則ち隱名を用ふ。

六五　高蘭亭

〔高惟馨、字は子式、蘭亭と號し、又、東里と號す。本姓は高野、裁して高と爲す、江戸の人。〕蘭亭の父勝春、百里居士と號し、俳偕を以て世に名あり。蘭亭幼にして徂徠に從つて學び、既に其大義を了す。而して十七のとき簪と爲り、是れより壹に心を詩に潛む。三百篇以下、漢、魏、六朝、唐、明大家の作、大低之を暗誦す。其自ら賦する所、殆んど佳境に入り、遂に一時の名士南郭が輩と聲譽並馳す。紫芝園漫筆に曰く、胡元瑞が詩藪に云ふ、唐人宋雍初め令譽なし、簪疾に嬰るに及び、詩名始めて彰ると雲溪友議に見ゆ。吾友高子式、年十七にして明を失ひ、厥後詩才漸く高し。豈に造

物の均なるか、人をして其長を兼有せざらしむるか、抑〻造物の慈なる、人をして彼に失はゞ此に得しむるか。

蘭亭生前の學止、盡く相者を俟つ、是に於て簪者偲々の狀を爲さず。嘗て曰く、余が明未だ喪はれざる時、盲人の動もすれば其左右を模索するを見るに堪へざりき。豈今之に效はんやと。

世に蘭亭盲後の書蹟といふものあり、此れ世人盲ひて求むる者也。天履仁敗張を藏す、嘗て曰く、人の蘭亭の書を喜ぶは、徒に玩弄に供するのみ、余其蹟をして他日人の媟瀆に逢はしむるに忍びずと、遂に皆土中に瘞む。

蘭亭の詩、人と往復する者、毎に藤華岡に屬して之を書せしむ、故に時人或は華岡を謂うて蘭亭の書佐と爲す。

吾祖少年江戸に在るの時、蘭亭と親善す、嘗て祖に謂つて曰く、余婚を寛む、媒媼の云く、二氏あり、一は則ち姿色に多りて、女工に拙、一は則ち才德有りて貌甚だ寢と、吁才色並び茂きは古へより得難しと爲す、苟くも此に一あれば則ち足る、余何れか之を妻と爲さんと、祖曰く、色を愛する者は、目見て而して後心之を悅ぶ、未だ始より見ることあらざれば、則ち醜美何ぞ論ぜん、如かず、其刺繡

に善きを納れて、以て家事を理めしめんにはと、蘭亭嘆じて曰く、誠に然り、誠に然り、交信を以てするに非ざれば、孰れか能く之を言はんと、然るに終に才德を舍てゝ、姿色を娶る、夫れ婦人は必ずしも貴むるに德を以てせずと雖も、而も亦色を以て主と爲す可からざるなり、蘭亭惑ひぬ、果して六たび娶つて終に子なし。

蘭亭は性酒に善し、而して豪宕奇を好み、常に髑髏杯を擧げて飲を爲す。伴蒿蹊が閑田次筆に、百井塘雨が雜記を引いて曰く、蘭亭鎌倉敎恩寺に於て、平重衡が舞妓千壽と宴を爲すの杯を得、此れより飲に興を添へしも、尙且つ足らず、大館次郎の墓を發いて、髑髏杯を制して、玩弄に供す。其墓を發くに當りて、大に雷雨す。而も敢て顧みず、遂に其意を行ふ。翌年此日暴に卒すと、此れ妄言を傳聞して佗に攷へざる也。蒿蹊之を信じ、以て蘭亭を毀るは、甚だ誤れり。凡そ倭學を爲す者多く儒者を厭ひ、一味慢罵す。蒿蹊も亦免れず。蘭亭病むこと數月、終に起たず、暴卒に非ざる也。山惟熊が撰する墓誌に見ゆ。余聞く鎌倉に今現に大館次郎が墓あり、過る者必ず就いて之を弔すと。奈何そ其れ之を發くことを得んや。秋玉山は蘭亭の友人也、髑髏杯行の詩あり。何人の髑髏たるを知らざるを陳す、乃ち序を幷せて之を錄す、序に曰く、高子式は達士也、髑髏杯を置きて時々把玩す、死生を一

にし形骸を遺れ、超然として自適す。少年强爭ひ飲んで豪擧と爲す、予獨り蹙頞して飲むこと能はず。衆予が未達を笑ふ。因つて髑髏杯行を作りて自ら嘲り、兼ねて髑髏の爲めに嘲を解く。詩に曰く、「既に月支の頭に非ず。亦知伯が仇無し。山人奇を好みて奇骨に至る。日に美酒を盛るに髑髏を以てす。少年爭ひ飲んで豪擧に誇る。皆道ふ山人は達士の流と。座中の一客字は子羽、蹙頞飲まず心獨り憂ふ。試に問ふ髑髏汝何の辜あつて、甘夢を驚駭して休することを得ざる。又問ふ汝何者ぞ、奴か隷か將た王侯か。樽前頭を搖して嬉笑に供す。若し侏儒に非ざれば必ず俳優ならん。髑髏答へて言ふ世に在るの時、只記す沈酒池に飲むを。又記す朝に漉酒巾を戴き、夕に白接離を著く。時あり興來りて草聖と稱す。帽を脫す何ぞ妨げん鬢絲の如きを。一たび蹉跎して山阿に歸せしより、貴賤貧富復た知らず。我肉既に烏鳶の腹に飫しめ、我顱偶爾として鴟夷に匹す。我形須ひず司命の復すを。我魂要せず宋玉の辭、糟丘の煙霞我れを喚び起す。知己誰れか山人の奇に如かん。山人日々我が頂を摩す。髑然何ぞ天下を利することを爲さん。蓬蒿を出離して綺席に厠る。子羽謾に支離を嘲ることを莫れ。我聞く古の酒人、一棺徒に身を戢む。縱ひ陶家の土に葬らるも、何ぞ湘水の濱に異ならん。涓滴到らず劉伶が冢、南州の鷄絮豈に唇を沾さんや。淵明終に臨んで足ることを得ず。畢卓生を了して復た晨せず。古來

酒人孰れか我れに如かん。宿習綿々天眞に醉ふ。管せず功名の朽と不朽と。論ぜず形神の親と不親と。未だ阿梨七分破るゝことを爲さず。常に染む酴醾萬斛の春。君見ずや無功が日月醉鄉に終ふ。鄙生が意氣高陽に盡く。中山千日偏に短きを苦しむ。百年三萬も亦長きに非ず。嵇阮化して褐の文と爲り、黄公壚下暗に悲傷す。笑殺す人間北海の守。何ぞ如かん地下南面の王に。自ら諮る唯我酣暢なるかな。長夜首を濡して首杯と作る。子羽の頭顱此語を聞いて、同口に子羽を責む。子羽汝は生頭顱たり。彼は死頭顱たり。生死の頭顱亦奚ぞ擇ばん。況んや子璋が血摸糊なるに勝るをや。壁頰飲まず一に何ぞ愚なる、汝今飲まず歲將に去らんとす。俛仰の間彼れと伍を爲さん」と。

蘭亭故と勝情を負ふ。鎌倉の山水奇麗なるを喜び、歲に一再名人韻士と相追隨し、品題殆んど遍し。嘗て茅堂を圓覺寺の傍に結び、松濤館と名づけ、以て遊息の所と爲す。曰く、吾れ死して其れ即ち此に安ぜんかと。乃ち壽碣を建て、松崎君修記を撰す。後三年江戸に卒す。門人槨を輿し、往いて之を營葬す。

六六　井蘭臺

〔井通熙、字は叔、小字は嘉膳、蘭臺と號し、又、圖南と號す。姓は井上、修めて井氏と爲す。江戸の人。備前侯に仕ふ。〕

蘭臺の先は、周防大内氏の族也。七世の祖某、逆臣陶晴賢の難に死す。某井上氏を娶り、了心を生む。了心母姓を冒し、爾後世々之を沿稱す。父通翁字は玄璠、大府の醫員也。三男子あり、伯は玄存、職祿を襲ぐ。仲は蚤夭す。叔は則ち蘭臺也。幼にして穎敏學を好む。年十二、元日詩を賦して云く、「天邊雲物改まり、海上日華新なり、先づ酌む屠蘇の酒、庭に趨つて老親に獻ず」と。父之を異とし、期するに他日の盛名を以てす。弱冠にして天野曾原(名は景胤)に從つて學ぶ。既にして林鳳岡の門に入る。享保中鳳岡旨を奉じて官庫の書を校す。蘭臺與れり。時に未だ蘭臺の號あらず、而して人は蘭臺を以て之を呼ぶ、遂に以て號と爲す。元文五年、辟に備前侯に應じ、教授の職に任ず。

蘭臺字は叔、而して世以て子叔と爲す者は、石筑波の山陽行錄に序して、子叔と稱せしによる也(山陽行錄は蘭臺著す所)。

蘭臺戶を閉ぢて書を讀み、客至るあれば、則ち自ら答ふるに不在を以てす。客以て戲れと爲す。蘭臺聲を勵まして曰く、主人自ら答ふる此の如し。何の僞か之あらんと。書を讀みて輟まず。

蘭臺伊洛の學を信ぜず。嘗て讀鳩巢室先生文を作りて、其固く朱說を守るを非駁し、且つ國家必ずしも宋儒に依らざるの證を舉げて曰く、通熙縞に以爲らく、先朝の行ふ所にして、後世の必ず行ふ者、漢氏は公羊を好み、宣帝の穀梁を立つるを當せざる、其遇ふ所の時異なれば也。國初官板の諸書も、亦宋儒の著す所に非ざる也。豈に盡く程朱の說を取ると爲さんや。文敏公嘗て經筵に侍し、論語を進講す。厩焚の章に、神祖曰く不を讀んで否と爲すは如何と。曰く臣謂ふに、人を問ふ可く、亦馬を問はざる可けんや。曰く、然らば朱熹の解に非ざる也。臣愚以爲らく、若し國厩と云はゞ、則ち馬を問ふ可き也。是れ孔子の私厩也、則ち人を重んじて畜を賤む。其義當に然るべきなり。不を讀んで否と爲すは、固より朱註の意に非ざる也、對問の語、載せて本集に在り。當時經筵の盡く朱註に依らざる、亦見る可し。享保中、講官物先生朝命を奉じて古註疏を校す。室先生も亦與れり。編成りて進呈し、悉く以て梓に鋟して天下に頒布す。七經孟子考文是れ也。伏して惟ふに朝廷の德意、先後各〻立つる所あり。必ずしも相依らざる也。然らば則ち諸家の學、義相反すと雖も、猶並びて之を置く、豈に偏絕す可けんや。

蘭臺の學、頗る徂徠に似る者あり。澁井太室曰く、蘭臺は告子の言に得ざれば心に求むる勿れの如

しと、（讀書會意）邨正哥に答ふる書に、其所見を陳す。左に節錄す。曰く、夫れ道は大路の如く然り、瞽往き聰者往く。豈に之を辨究せんや。心性は學問の先つ所に非ざる也。是故に六經は之を論ぜず、孔子も亦罕言する所也。思孟の書首唱して、而して後に性道の說、紛々として競起し、遂に宋儒に至つて極まれり。其弊や蹶然として大澤に陷る。又、曰く、夫れ古の聖王の道を立てゝ、以て天下の人をして之に由つて行はしむる者、豈に谿壑の水涸れて徒跣す可き者の如くならんや。道は猶溟渤の測る可からざるごとし。人性も亦猶舟楫のごとし。舟楫海に遵つて漕れば、則ち百萬の粟運して致す可し。然りと雖も、海と舟楫と一物に非ざる也。人性道を守つて行はゞ、則ち億兆の衆教へて用ふ可し。然りと雖も、道と人性とは一物に非ざる也。又曰く、熙幼にして孤貧、師保の訓なし。然りと雖も、詩を誦して雅頌あるを知り、書を讀みて堯舜あるを知る。然る後に、困學二十年一日の如く、益〻仲尼の道を信ず。何の暇あつて宋儒、滕、物二家に及ばんや。宋儒は聖人を知らず、與に之を言ふに足らず。滕維楨自ら古學と稱するも、宋儒の弊を免れず。物茂卿二辨を作爲して、又、論語徵、庸學解を著すも、亦唯二義及定本發揮と奚ぞ擇ばんや。緣飾する所あつて仁齋を駁する者も、亦果して是か非か。熙の未だ知らざる所也、と。

非上金峨は業を蘭臺に受く。蘭臺之を友視し、待つに弟子を以てせず。毎に謂うて曰く、子は誠に才ある者也。自ら當に一家を成すべし。吾籬下に立つて人に後るゝこと勿れと。金峨後自己の見を立つるも、而も尚父執蘭臺先生と稱し、終身師事す。

嘗て齒を牛島の牛女祠畔に瘞め、石を立てゝ之を表し、金峨をして記を作り、東江をして書册せしむ。蘭臺の沒後に、東江以爲らく、字未だ工ならすと、乃ち石を易へて改書す。蓋し初めは楷を以てし、後には八分を以てす。

蘭臺少より婬欲を絕す。其婦人に於ける、老少となく、一語を交ふることを欲せず。人所を訪ひ、宴飲歡を爲すの時に方ると雖も、婦女出づれば卽ち速に辭し去る。

蘭臺戸口氏の子を養つて嗣と爲す、潛字は仲龍、四明と號す。學博く行修まる。早に重名あり。今年八十七瞿鑠能く古を談ず。男觀字は賓王、亦儒職を承く。孫四人あり、長は天祥、字は徵民、次は天鼎、字は先民、次は天祐、字は順民、次は天爵、字は錫民、皆善士也。蓋し蘭臺が德澤の及ぶ所と云ふ。

六七　石川麟洲

〔石川正恒、字は伯卿、小字は平兵衛、麟洲と號す。平安の人。小倉侯に仕ふ。〕

麟洲幼より學を好み才氣を負ふ。先輩皆其成すことあるを期す。初め柳滄洲、堀南湖に從つて學ぶ。弱冠の比、其父拉して江戸に來り某生に見ゆ。生則ち修辭家が作る所の艱澀の文を出して之を試む。麟洲一目輒ち誦を成す。生驚いて之を器重す。壯なるに及び小笠原侯の徵に應じて、後進を誘掖す。其啓廸作興の功尤も多し。寶曆巳卯、父を京に省す。會〻疾作りて遂に起たず。時に年五十有三。

麟洲嘗て辨道解蔽を著し、徂徠の學を彈刺す。其詩論多くは緐に中る。門人增井彥敬も亦儒を以て名あり。同じく小倉に仕へて教授たり。石增二先生の文抄世に行はる。彥敬嘗て書を吾祖に修めて交を求む、祖が復書に曰く、蓋し石子逝いて後、其著す所の辨道解蔽といふ者を獲て之を讀む。論なし其の鄙見と頗る異同あるは。然れども其大要は大に鄙衷に合する者あり、乃ち潸然たること久うして曰く、夫れ聖遠く道湮つ。諸家紛然として晚生後學墻面無きに匪ず。而して能く卓爾として群を出で、以て後進の木鐸と爲る可き者、方今僅に石子翟あるのみ。奚爲ぞ斯人にして長逝するや。

六八 湯常山

〔湯元禎、字は之祥、小字は新兵衛、常山と號す。姓は湯淺、修して湯氏と爲す。備前の人。世世國侯に仕ふ。〕

常山の父子傑、素より學を好む。常山結髮より庭訓を受けて書を讀むことを知る。時に其藩に曹子漢といふ者あり。伊物の説を悅ぶ。常山之に兄事して勉學倦まず。年二十四江戸に來る。是時贄を南郭に取り、專ら古文辭を修む。幾くもなくして鄉に還る。後八年復た江戸に來り、春臺及蘭臺觀海の諸名人と交を結び、噴々として輿稱ありと云ふ。

寛延庚午、侯命を奉じて讃の丸龜に赴く。海上風濤驟に起り、舟將に覆沒せんとす。衆皆生色無し。常山神色自若、朗吟して曰く、「南溟に使を奉ず使臣の槎、直に破る長風萬里の波、忽ち値ふ怒濤の奔馬に似たるに、起つて雄劍を提げて電龜を叱す」と。其豪氣なること此の如し。

常山人と爲り方正特立、身を忘れて國に殉ふ。數〻要職を歷、其爲す所貧に賑はし窮を救ひ、慝を詰め滯を舉げ、或は訟者をして自ら恥ぢて言なからしめ、或は契券を焚きて衆人を庇覆す。然れども危

言刺譏避くる所なく、終に乃ち貶黜せらる。是れより門を杜ぢ客を謝し、著書自ら娛しむ。松崎子允に答ふる書に曰く、禎や豈に敢て廉隅を砥厲して名聲を鼓簧せんや。亦唯公事に非らざれば、未だ嘗て權貴の門に至らず。十有七年一日、其自信する所是れのみと。又、觀海に復する書に曰く、禎や行行の性、狂愚悻直、機微を知らず、危言忌む所なし。亦且つ强を抑へ弱を植つ。當路の惡む所、此數事を以て衆口金を鑠かすの日に當る。其及ぶや宜なり。幸に寡君の仁恕に賴り、特に末減に從ひ、明善をして祿を襲ぎ、黑衣の缺を補ひ、人臣の事を執らしむ。君恩は知らざる可からざる也と。

常山恒に武を好む、其文集に古名將の事を紀する者極めて多し。常山紀談を著し、亦戰國の義に死し節に伏せる忠臣勇者の迹を索め、或は異傳雜説を考覈す。此れ皆武を好むの心に出づる也。每に子弟を戒めて曰く、苟も武士たる者は、寧ろ文事を廢するも、武事を廢すること勿れと。

常山大府の代官野口直方(小字は辰之助)と友とし善し。直方嘗て備中倉敷に住す。其去つて江戸に赴くに及び、侯常山をして之を郊外に送らしむ。常山男子誠を携へて送り、謂つて曰く、元禎今日君を送らんと欲す、公事ありて果さず。故に兒をして代らしむと。直方曰く、異なるかな言や、先生已に辱く自ら臨むと。常山曰く、今日君を送るものは寡君の命ずる所、私送に非ざる也。余は則ち兒

をして代り送らしむるのみと。

井四明が撰する行狀に曰く、先生壯歲にして父を喪ひ、哀毀禮に過ぐ。衰以て襯と爲し三年脫せず。毎旦往いて其墓を拜し、慟哭して歸る。二十五月にして止む、母を喪ひしときも亦斯くの如し。其忌日に値へば、必ず嗜む所の者を薦め、告ぐるに生日の語を以てし、哭泣失聲して已む。

六九　瀧鶴臺

〔瀧長愷、字は彌八、鶴臺と號す。長門の人。本府に仕ふ。〕

鶴臺本姓は引頭氏、瀧に後たり。遂に其姓を蒙むる。幼より英邁學を好み、其鄉に居る、周南に從つて徂徠の說を承く。後江戸に來る。時に徂徠沒して已に三年。乃ち南郭の門に遊ぶ。南郭其才を異とし、視るに弟子を以てせず。既にして去りて京に到り、又、長崎に之く。往く所として其才學を重んぜざるは莫し。再び江戸に來るときは、則ち名聲大に起り、從遊する者甚だ多し、寶曆癸未、韓使來聘す。是に於て君命を奉じて鄉に歸り之に接伴す。韓使其學の該博力あるを嘆ずと云ふ。

紀平洲が小語に曰く、長門の瀧長愷彌八、鄉に在りて一權貴に飲む。酒酣にして問うて曰く、凡そ

治を爲す和漢孰れが難易と、彌八曰く漢難にして和は易しと。曰く何ぞや。曰く彼は不學の人をして政職に居らしむれば、則ち必ず其制を受くるを恥づ。我は不學の人稱く政職に居ると雖も、而かも下亦其制を受くることを恥ぢず。彼の難にして我の易なる所以也と。合坐色[illegible]其人以て君に告ぐ、君曰く、公等を諷刺す。唯是れ此老と。又、曰く、彌八豪邁、物に屈することを能はず、然れども善言美行を與り聞く、涙必ず睫に交はると。

鶴臺旁ら博く釋氏の書を窺ひ、殆んど其說を極む。行狀に曰く、最も佛學に精し。其海北に在るや、佛藏を傾けて其旨を究む。藩の宿僧無隱無學の輩、皆推服を極む。其他緇徒其說を得ざれば、則ち就いて質す者ありと。又、無隱禪師が雜華集に載する、瀧彌八が來訪を謝する詩の引に曰く、瀧生は實に天下の奇才也、其深く儒術に邃し、言語炙輠たるは論なし。傍ら吾佛學に精し、故を以て余と方外寡二の交を爲す者、平生の贈答を見る可し。而して事は尤も此集の序文に詳なり、爰に偶〻其來訪を辱うす。別れに臨みて此詩を賦して謝し、兼ねて和子夢に寄す。詩に曰く、「遲日青山黃鳥啼く、歡に堪へたり陶令が出接を訪ふを、城中の靈運若し相問はば、爲めに道へ君を送りて虎溪を過ぐと」。

雜華集に又載す、瀧生書を能くす。其義之の筆法を嗜むこと余と癖を同うす。因つて此詩を爲つて

相嘉尚す、詩に曰く、「相逢ふ文雅の友、臂を把つて意何ぞ親む、遙少墨池の月、千里兩人を照す」。と。鶴臺の南塘先生に與ふる書に曰く、本邦の書、尊國王の嫵媚脆弱を以て一家を成せしより、後世の書家共毒を被らざる者無き也。豈に至りても亦然り。狩野氏浮靡輕佻を以て世俗の好に投じ、譽を當時に擅にしてより、聲に吠え臭を逐ふの徒、靡然として風に嚮ふと。此れを觀れば鶴臺の書豈に於ける、亦識ありと謂ふ可し。春臺嘗て稱して西海第一の才子と爲す、虛聲の讚揚に非ざる也。

又兼ねて軒岐の術を好み、山脇玄飛、香川太冲、吉益周助が輩に交り、所謂古醫方を喜び、宋、明後の說を屑とせず。其七劑屢〻効ありと云ふ。奈大夏に與ふるの書に曰く、不佞斯に在り、詩を乞ひ書を乞ひ誹を乞ひ邀欲する者に論なし。診を乞ふ者も亦履恒に戶に盈つ。其煩に勝へず。而かも亦以て問曠を消するに足る也と。又、秦貞父に與ふる書に曰く、不佞が近狀聞す可き者無し。醫事頗る劇にして、其煩に堪へず。然りと雖も、夫の世醫の利に趨りて其術を攻めず。言拙を飾りて人を非命に斃すの不仁甚しきを疾む。是を以て黽勉事に從ふ、亦唯乘輿人を濟すの類、多し。以て誹笑を取るに足る也と。

七〇 宇濯水

〔宇惠、字は子廸、小字は惠助、濯水と號す。本姓は宇佐美、修して宇[illegible]す。南總の人。出雲侯に仕ふ。〕

濯水は南總夷濯郡に生る。郡に川あり、夷濯川と曰ふ。居之に近し、因つて濯水と號す。父翁習學を好みて志あり。濯水年十七、父命じて江戶に來り、徂徠に師事せしむ。乃ち其塾に在ること僅に三年にして、徂徠沒す。未だ全く徂徠の旨を得ず。則ち留つて社友と相劘切す。居ること六年、板美中を携へて鄉に歸り、卽ち美中を以て食客と爲し、日〻切劘を資く。之を久うして學大に進み、再び江戶に來り、芝三島街に住み、門を開きて徒に授く。晩に儒を以て出雲侯に顯仕し、其政に與聞して勞勩ありと云ふ。

濯水の家は世〻南總に居り、豪富を以て聞ゆ。熊耳が濯水の父を誄する頌に曰く、「翁は本と大姓、藤氏に系す。先に北越に著はれ、武功是れ以ふ。子孫綿々、宇佐美と稱す。中葉微なりと雖も、祀を絕つに至らず、來りて爰に居してより、此に數世、農と賈とに服し、家富を以て起る、豪宗多しと雖

も、曾て共に比する莫し、翁其業を繼いで、益〻以て不背、鐘を鳴して鼎に食す千指に幾し、聚れば斯に之を散ず。亦唯是の理、鄉鄰を賑及して、多く恃んで湘錡す」と。（上下畧す）

灊水篤く徂徠を信じ、力を畢して其遺著を校刻す。高足の弟子と雖も、及ばざる所なり。四家備、古文矩、文變考、絕句解拾遺、南留別志の如き、校刻皆灊水の手に成る。其自ら著す所、辨道考、辨名考、絕句解考證、絕句解拾遺考証も、亦皆徂徠の意を領會するを以て主と爲す。

灊水莊重嚴毅、師道卓然、列侯の敎を請ふ者あれば、卽ち先づ己を待つの儀を書し、之を致して後往く、井金峨が匡正錄に曰く、近世の諸老諸侯の招に應じ、豫め之が禮待を期す。苟くも是の如くならざれば則ち我は敢て見ずと曰ふ者あり。夫れ見ざれば則ち已む。唯見て禮至らず。亦以て之を去る可きのみ。惡ぞ先づ之が極を爲して、後往く者あらんやと。金峨の此言、理に於て乖けりと爲さず。然りと雖も、世の道を學びて苟合して容を取る者、灊氏に覩れば慚無かる可けんや。

灊水經義を以て任と爲し、頗る春臺の風あり。熊耳は長技文章に在り。殆んど多南郭を追うて交相譽し、熊耳謂うて久要兄弟の誼ありと爲す。

灊水に一男あり、多病家學に堪へざるを以ての故に、片山兼山を聘つて子と爲す。兼山徂徠の說を

喜ばず。是を以て終に獄を承くることを得ずして出づ。是に於て姪德修字は子業を以て後と爲す。

七一 武梅龍

〔武欽錄、字は聖謨、梅龍と號す。初名は維嶽、字は峻卿、中名は亮、字は子明、文靖と私謚す。美濃の人。〕

梅龍本姓は武田氏、其先三河篠田村に處る。故に世々篠田を以て氏と爲す。梅龍初め襲で之を稱す。明覆遺稿中に篠士明と稱する者是れ也。後本に復すと雖も、亦田を省いて單姓と爲す。少年のとき伊藤東涯を師とす。東涯爲めに維岳字は峻卿の說を作りて、之を勗めしむ。而して年廿一、東涯下世す。乃ち祭文あり。是に於て宇士新に從ふ。居ること十年士新も亦世を異にす。乃ち哭詩あり。此時學既に大成す。終に召されて妙法院親王の侍讀と爲る。

梅龍は特に藝文に通ずるのみに非ず。兼れて武事に名あり。其の昔を憶ふ歌に、「東山の年少雄圖を抱き、弓を學び馬を走して孫吳を讀む。腰間の龍劒金轆轤、青雲を睥睨して常に烏呼す、飜然節を折つて前途を改む、自見す當年君子の儒」と。又、宇士新に贈詩あり云く、「關を閉ぢ我が久を憐み、

劍を説いて君が深を愛す、」と。又、墓碣の記に云く、少時武技を習ひ、孫吳の書を講明す。居常曰く、絳灌は文無く、隨陸は武無し、全士と稱す可からざる也と。

赤松國鸞同門に出でて、其學亦一時に領袖たり。而して甚だ梅龍を重んず。其梅龍に與ふる書に曰く、鴻は少時平安に遊び、宇先生に從ふこと歲餘、薄命限りあり。未だ益を請ふを盡さずして歸る。何も無くして先生逝く。乃ち後數歲、薄命を以て東武に之き、道平安を過ぐ。林生を訪ひ、相與に先生の墓に謁す。感泣已むこと能はず。林生乃ち不佞に謂ふ。子何ぞ一たび武兄を見て交を定めざるや、其人才學富贍、且つ宇先生の敎を奉じて年ありと。鴻不佞遂に林生に介して足下を見る、則ち唯に典刑の存するのみならず、其言の夫子に似たる、人をして感喜交〻併せしむと。

七二　原尙菴

〔家祖原瑜、字は公瑤、小字は三右衛門、鯉桂と號し、又尙菴と號す。平安の人。唐津侯に仕ふ。（侯後に古河に移封す）〕

祖の父を光茂と曰ふ。小字は三右衛門、甲斐武田機山公の將、原虎胤（美濃守）が六世の孫也、平安に住みて仕へず。原芸菴の女を娶り、（芸菴平安に居る、其子も亦芸菴を襲稱して江戸に居り、共に醫を以て名あり）享保三年十月十三日を以て祖を生む。祖生れて凝倩群兒に異り、十歲にして章句を伊藤東涯に受け、漸く長じて學を嗜むこと飢渴の如く、口誦手錄、晝夜廢せず、父母内に之を奇とするも、而も其或は疾を得るを過慮し、謂つて曰く、雖を下して憤を發するは成人の事、兒今童年、惟學んで間斷無くんば可也と。祖曰く、蚤起して文字を尋思す、心下爽を覺ゆ。稍〻晏れば則ち頭岑として心裏甚だ安からずと。人或は曰く、其先美濃守は驍勇を以て著る。此子他日亦文事を以て大に人に過ぐるあらんと。

年十四にして父を喪ひ、哀毀禮に過ぐ。服闋りて大坂に之き、既にして江戸に來り、舅氏原芸菴に依り、青厚甫、高子式、呂玄文が徂と往還して文を論ず。居ること三歲、世を念うて已まず。乃ち大坂に赴く、母尋で病沒す。喪を治め痛を茹ひ、遂に復た京に歸る。

祖兼ねて醫を善くす。其京に居るや遠近來りて治を請ふ者、履恒に戶外に滿つ。時に土井侯良醫を召す。祖幡然聘に應じて起つ。山脇東洋來り謂つて曰く、請ふ辟に就くこと勿れ、君は學富量深、他日必ず當に三顧の人に遇ひ、其用を竟るべし。醫術の如き它人に於ては稱す可し。君に於ては乃ち末

技のみ。末技を以て僻遠の藩に屈仕す。甚だ之を惜むと。祖曰く、於乎子の言ふ所の如き者、宇宙幾くあらんや。吾烏ぞ敢て之に當らん。且つ已に其召に應ず。義辭す可からざる也と。遂に唐津に適く。十八年を閲へ京に歸遊す。途に東洋祖の手を握りて嘆じて曰く、平々の庸器をして皆貴顯に列せしめ、而して海内の名士をして僻遠に屏處せしむ。信に命あるかなと。

唐津に在るの日、地を掘つて髑髏に遇ふ。其夕月明窓紙に女子の影あるを見る。出でて視れば則ち無し。家人大に怖る。祖讀書自如、頃あつて笑つて先子(時に年十二三)に謂つて曰く、是れ狐狸の爲す所、兒弓を將て之を射よと、是に於て女影自ら滅す。

嘗て芳野に遊び櫻花を賞す、耽戀三日去ること能はず。遂に一枝を折つて携へ去り、後制して杖と爲し、終身之を手にす。其常に帶ぶる所の二劍の柄飾に、金を以て櫻花を彫畫す。亦其忘ること能はざるを表する也。

家に二馬を畜ふ。一は蓬萊と名づけ、一は瑤池と名づく。蓬萊は仙鑾の產、駿駒常に異り、初め某侯重價を出して求購す。而して蹄嚙近づく可からず。遂に之を鬻ぐ。是に於て鹽車に厄せられ、又、其飼秣を奪はる。祖之を聞いて曰く、惜いかな其能を展べずして、暴戾自ら縱にするは、此れ之れ

を御する者、惟其術を得ざるに由るのみと。因つて復た之を數金に買ひ、乃ち一食をして一石の粟を盡さしむ。則ち雄姿龍の如し。然るに其亂氣も亦初めの如し。諸々騎を善くする者、各々其術を施して御することを得ず。祖獨り其駿を捉り、躍つて之に上れば、則ち鞭筴の威を假らずして能く其訓に安んじ、進退周旋意の如くならざるは無し。詩あり云く、「驕氣龍鍾たり村客の家、三年虞坂鹽車に苦しみ、一朝忽ち英雄の駕を獲、飛電風を生じて白沙を捲く」と。

祖奮然道を究め經を治むるを以て志と爲し、漢儒以來の諸說に於て親はざる所なし。之を久うして以爲らく咸聖人の旨を得ずと。遂に自己の見を立て論孟を以て根據と爲し、細に道德性命を講ず。嘗て一書を著し名づけて洙泗微響と曰ふ。謂ふ是れ以て百世聖人を俟つて而して惑はざるに庶幾す可しと、其大意は增彥敬に復する書中に詳にす、書既に雙桂集に載す。玆に復た贅せず。夫れ漢唐訓詁の學、道に於て得る所なし。宋に至つて其說く所大に變じ、而して大に行はる、然れども亦聖人の旨に非ず。此邦元寬以來、學者亦皆宋儒に從ふ。伊藤仁齋に及びて始めて之を排す。物徂徠も亦一家の言を成し、海内の士と別に旗鼓を建て〻馳す。然れども其說聖人の說を去ること益〻遠し。祖の時に當つて、學者朱に非ざれば卽ち物、物に非ざれば則ち藤、是に於て慨然として非朱、詰物、疑藤の三種

を作り、洙泗微響と將に併せて以て梓に鐫せんとす、而れども天早く年を奪ひ、大業をして終らざらしむ、深く惜む可きかな。

祖曰く、宋儒は聖學の演義也。陳志に云く、王允潛に卓の將呂布に結び、內應を爲さしむ、又、云く、董卓は呂布をして中閤を守らしむ。而して布私に侍婢と情通す、布自ら安んぜず。遂に卓を刺殺すと、而して演義之に添ふるに貂蟬連環の計を以てする、猶宋儒の易に窮理の二字あるを以て、許多格物致知の說を添へ、形氣の章に許多の體用、理氣を添へ、樂記の天理人欲に許多の本然氣質を添ふるがごとし。畢竟聖人未だ嘗て言はざるの說を以て之を敷衍す。之れ宋學の猶演義三國志のごとくならざるかと。

又、曰く、宋儒は體に精にして用に粗なり。物氏は用を知りて體を知らず。之を均るに其失は一のみ。然りと雖も、寧ろ宋儒たるも物氏と爲らずと。

又、曰く、徂徠每に謂ふ、宋儒の說は佛氏の所謂偏一切法界と、若し佛の異同を論ぜば、則ち徂徠の說、豈佛氏の捨身信他念佛衆生攝取不捨の說より轉化し來るに非ざるかと。

又、曰く徂徠の學は、猶演劇に聖人を扮するがごとき也、堯の服を服し、堯の言を誦じ、堯の行を

行ふ。是れ堯のみ、此れ孟子爲めにすることあつて之を言ふ。而して徂徠恒に引いて其學を徵し、異して其心と德との何如を問はず、則ち大友の眞鳥に類す。孰れか之を拜して眞天子と爲さんや。（眞鳥衆を聚めて僭號す、未だ幾ならずして天兵之を平ぐ。雙桂集卷六に先儒を論ずるの條、併せ見る可し）

藩中の一士人に南條某といふ者あり。稻葉迂齋に從うて學ぶ。嘗て祖が增彥敬に復する書中に、凡そ人の生ある、仁義禮智其他百德は皆性の具する所、則ち具する所と雖も、猶是れ微なりの語を視て、其旨を領せず、祖の門人古館尙渟、恩田大雅に因つて之を問ふ。祖兩端を叩いて之を竭くす、而も彼れ猶朱說を守り問答反復數十條に及ぶ。古館恩田二子、其語を筆記し、聖學辨談錄と名づく。亦吾家學の大旨を窺ふに足る、他日予將に刊布せんとす。

年二十八京を去りしより、五十來りて江戸に沒するに至るまで、唐津古河に僻居す。中間合せて二十三年、是を以て交道甚だ廣からず。則ち世未だ實に祖を知る者あらず。尙且つ之を稱する者伊藤原藏幼にして其門に學ぶの時を謂うて、後進の領袖と爲す。伊藤才藏曰く、幼にして穎敏學を嗜み、早に神童の稱あり。長ずるに及び博學能文、名の爲めに動かず。利の爲めに謀らずと。青厚甫曰く、良

吏の才ありと。芥彦章曰く、海の四東轍迹巡る。群儒に等して大論を建て、古聖を考へて倫を謬らず、命世の傑先覺の民と。又、曰く其の事を紀する、之を武事に方るに老將の兵を用ひて縱騁羈す可からず。而して自ら律度に中るが如しと。僧大潮曰く、今士林操觚の諸子、將に尸して之を祝せんとすと。又、曰く、其吾を送るの序、昭明文選の諸賦を讀むに似、宏麗雄渾誦す可き也。先達言あり。夫れ文は則ち材、諸を文選に取ると。余原文に於ても亦云ふと。服仲英初めて見、劇談半日退いて嘆じて曰く、雙桂先生の如きに至らば、則ち文藝の能事畢れりと。

祖の大男芸菴、人と爲り廓達奇偉、良醫を以て一世に振ふ。毎に人に謂つて曰く、世吾蚓公瑤を稱して大儒と爲す。余は以て腐儒と爲すと。古河の老小杉元卿嘗て江戸に至り、之を聞いて曰く、渠れ其族に阿る無きは可なり。其之を譏謗するに至つては、見て以て詰問せざる可からずと。明日芸菴至る。元卿盛氣相詰りて曰く、余聞く吾子毎に腐儒を以て吾師雙桂先生を呼ぶと、敢て問ふ説ありや否やと。曰く、君未だ之を知らざるか、夫れ古の大儒は必ず貧困にして陋閭を守る。然るに公瑤家資頗る富む。是れ余の目するに腐儒を以てする所以也と。元卿掌を抵つて大に笑ふ。蓋し其腐と富と音近きを以て也。

祖年十五京を出で、十九にして歸る。是歲東涯故す。此れ其提誨を受くる實に幼時に屬す。後一家の説を爲し、伊藤氏と迥に異る。而かも疑藤を作つて縱に之を辨ぜざる者、蓋師に背くに忍びざれば也。

祖音律を好む。古河に在りし日、日光の樂師上松是雙と云ふ者を邀へ、笙を學びて其道を盡す。祖常に玩ぶ所の笙を海棠と名づく。蓋し畫くに海棠を以てするが故に名づく。先子横笛に善く、門人古館尚淳笛樂に善し。時に合奏して娛を爲す。柴栗山、嘗て京都より佐野に往かんとし、路に古河を過ぎ、琴を携へて來り謁し、爲めに一曲を彈ず。

嘗て君侯に扈して長崎に至る。侯客館を過ぎ、乃ち祖をして清商に接せしむ。祖妙に象嵗に通じ、或は詩餘を吟じ小曲を唱ふ。四人咸舌を咋す。侯大に喜び、侯また福濟寺に至る、寺主は支那僧也。其藏する所の書畫數十品出して示す。侯亦祖をして之を鑒せしむ。其工拙眞僞皆能く辨別す。或は彼れ讀むこと能はざる者、一覽輒ち之を讀む。侯亦大に喜び、藩に歸るの後之を賞賚す。

祖に大夫の子三人あり、長諱は良胤、字は朴伯、一菴と號す。幼にして穎敏、志を家學に篤うす。而るに祖に先つこと七年に卒す。寶曆庚辰六月七日を以て年僅に十有九、祖其墓に記して曰く、人と爲

り嚴殺、遊朋群居の時と雖も、未だ嘗て聲色財利の事に及ばず。瑜嘗て謂ふ行〻且つ長成せば、箕裘の託吾れ其れ憂なし。何如ぞ不幸未だ冠せずして夭すと。又、唐津を去るに及び墓に別るゝの詩に云く、「寂寞たる空山一片の碑、庭を趨つて憐れむ爾詩を學ぶの時、面容髣髴猶見るが如し、淚は滴る丘前春樹の枝」と。次諱は恭胤、字は敬仲、即ち吾先子也。次諱は光寛、四歲にして夭す。

明和丁亥秋八月、先子を携へて江戸に遊ぶ。是時都下の人士、祖の名を聞いて來りて謁を求むる者林の如し。而も多くは之を謝絶す。九月疫を病む、原芸菴、松本尙濟、劑を措いて驗なし。閏九月四日に至り竟に起たず。年僅に半百。先子及門人相議して宅兆を江戸城北諏訪山の子院洞泉寺に定め、禮を以て葬る。後石を建て、銘序を勒し、芥彥章撰す。

吾母は土井侯の臣秋田重信が女也。年十六先子に歸す。居ること一年祖病んで沒し、先子服除いて襲いで任に就く、何もなくして病を以て致仕す。允されず、猶乞うて止まず。是を以て罪を獲、禁錮匝年、終に籍を削らる。初め其の辭を乞ふに當りて、母父母に謂うて曰く、汝の爲めに婿を擇ぶ時、以爲らく原氏の子才行あり。又、其祿を言へば則ち二百石也。是を以て之に要はす、豈謂はんや世を嗣ぐに及び、祿其半ばを減ぜられんとは、然れども猶以て飢うること無かる可し。其

の仕を辭するに至りては、則ち自ら其量を揆らざる也。夫れ士恒祿なくんば何を以て衣食せん。其壽壑に轉死する日を計つて待つ可き也。汝此の如き者に配して永く患難を歷んよりは、如かず更め適きて良匹を得んにはと。母潸然涕を零して曰く、嗚呼大人何ぞ此言を出せる、妾聞く女子の常理は二庭を踐まずと。又、先舅の時〻古の烈女を語るを聞くに、其稱述せらるゝ者、或は苦を嘗め、或は死を致し、以て其操を易へず。今や夫は妾を去らず、妾奈何ぞ自ら去るを求めん。且つ祿有れば配し、祿無ければ則ち離る。不義焉より大なるは莫し。假令再び醮して母に錦繡を纏ひ、口は粱肉に飽くも豈に願ふ所ならんやと。父母之を奪ふこと能はず。然るに猶愛を垂れ、時々睽離を勸めて置かず。而して母堅操同らず、遂に先子に從ふ。其先子に仕ふるや、儼として孟光の風あり。先子世を終るに至るまで、二十八年一日の如し。又、其姑に侍するや孝養備に至る。其始めて江戸に來るや、市中に僑居す。時に比鄰相謂うて曰く、新來の人姑と婦と恩情篤密、此れ必ず夫は贅壻にして、妻と母とは眞の母子也。然らずんば心を相盡す何ぞ斯の如くなるを得んやと。此言以て其平生を想ふ可し。初め先子に從つて將に古河を辭せんとするや、號泣天に籲で曰く、請ふ蚤く妾が命を察ひ、父母をして永く其世を同うして再會期なきかを憂ひしむること勿れ。若し之を得ざれば則ち歲一再必ず父母を見、藩を

去ると雖も、猶去らざる者のごとくならしめんと。既にして江戸に來り、先子大府の仕籍に入る。是れより後數〻父母に見ゆることを得。是に於て父母自ら前言を悔ゆることを云ふ。善も亦數〻其邸に出入し辱く侯及世子に謁し、著す所の賢相野史四卷、許我志三卷、及校刻する所の雙桂集六卷皆之を上る、褒稱賜を拜し、以て母の夙志に酬ゆるに足る。善不肖幼にして書を讀むことを好まず。其句讀を先子の膝下に受くる時、日〻督責を蒙むりて猶怠惰嘗めず。弱冠始めて學ばざる可からざるを覺るときは、則ち先子に背かる。此れより母寡居善く家事を治め、余をして一に事に鉛槧に從はしむ。今に至りて一も得る所なしと雖も、而も猶未だ箕裘を墜さざる、亦母の賜也。母は佛を奉ぜず。未だ嘗て珠串を掌し、佛號を誦せず。嘗て曰く、雙桂先生は儒宗也。其子敬仲先生も亦儒也、其子公道も亦俗士に非ず。之が婦と爲り妻と爲り母と爲る。奈何ぞ彼の天堂地獄の說を信ぜんやと。聞く者謂うて女中の丈夫と爲す。今茲文化丙子年六十六歲、健食恙なし。嗚呼其節義天性に出づと雖も、亦祖及先子の敎化に由つて然る無きを得んや。因つて併せて之に及ぶ。

新譯先哲叢談終

明治四十四年九月十五日印刷
明治四十四年九月十八日發行

學生文庫第十三編

譯者　大町桂月

發行者　東京市日本橋區本石町三丁目十四番地　加島虎吉

印刷者　東京市京橋區日吉町十番地　渡邊爲藏

定價金三十錢

先哲叢談

不許複製

發兌
東京市日本橋區本石町三丁目　電話本局三六六六番二一六七番　振替貯金口座東京一七四四番　至誠堂書店
東京市日本橋區住吉町二番地　電話濱花五八四九番　振替口座東京一九八四二番　至誠堂小賣部

印刷所　國民友社

大町桂月先生校訂解題

學生文庫

袖珍總クロース舶來上等紙刷特製美本

全部壹百册　定價各册金三拾錢　郵稅各四錢

發刊主旨

古典的知識は人の學德知能を深奥ならしむされど古典亦自ら良否のあるあり近時古書翻刻の續出するに際し大町桂月先生深く慨する處あり蹶起して茲に學生文庫を編せらる一々嚴密なる選擇の下に今の學生の必ず讀みて大に裨益あり且最も趣味深き先哲の良書を掲摭し校訂を精確にし毎巻達筆を以て周到なる解題を附し併も印刷は鮮明装幀は優良製本は最も堅牢價格は低廉にして今の駸々止まざる二十世紀の讀書界に副はんとす眞に是れ校訂書中の一大異彩

——(既　刊　書　目)——

1 南朝史傳 全
2 日本外史 上
3 益軒十訓 上
4 謠曲全集 上
5 曾我物語 全
6 西遊記 上
7 源平盛衰記 一
8 太平記 上
9 心學道話 全
10 常山紀談 上
11 日本外史 中
12 益軒十訓 中
13 先哲叢談 全

近刊

平家物語 上
源平盛衰記 二
狂言記 全
義經記 全
大岡政談 全
一休諸國物語 全

以下續々着手中

發兌　東京市本石町　至誠堂　振替東京一七四四

新譯漢文叢書第一編　大町桂月先生譯評　（二十版）

○新譯新評 日本外史

袖珍天金箱入特製　紙數壹千貳百頁　特價金壹圓貳拾錢　小包料金八錢

本書は近世の偉人絶代の文豪頼山陽が一生の心血の凝る所識見卓拔筆力雄麗古英雄一々紙表に生動し干戈の聲恍として机上に起る成敗の跡火を見るが如く大義爲めに明らかに天下の士氣爲めに振ふ實に東西無類の散文敍事詩なり現代の文豪大町桂月先生拮据三年之を今の文に移し文部省所定の假名遣に依り小學兒童にも容易に讀むを得せしむ嗚呼外史は斯くて永遠に復活すべし難解の字には解釋を附し治亂興亡の因る所を尋ねて奇拔痛快の批評を加ふること數百條山陽が常時を憚りて言ひ得ざりしことまでも遺憾なく顯はされて桂月先生獨得の妙を極む殊に奇一讀人をして血躍り腕鳴らしむ以て歴史を知るべく以て士氣を勵ますべく以て文學を味ふべし天下有爲の士此書を閑却して自ら資を捨つる勿れ

新譯漢文叢書第二編　友田宜剛先生評解　（四版）

○新譯評解 文章軌範

袖珍天金箱入特製　紙數壹千壹百頁　正價金壹圓拾錢　小包料金八錢

◉東京朝日新聞評、文章軌範を普通の日本文に譯し（本文悉くゴジック五號活字を用ふ）更に平易の口語文に通解し　別に又語釋を施し文の構造法を説明し上欄に原漢文を掲げたり文章軌範評解の書として最も初學者の通じ易きものにして　從來漢文の研究書たりし文章軌範は明治の日本文を習ふものゝ研究書となれり　著者は文章教授上に　一見地を具せる人斯人にして斯書あるは世人の期待に負かずと云ふ可し

新譯漢文叢書第三編　濱野知三郎先生評解　（再版）

○新譯　孟子　（附索引）

紬珍天金箱入特製　正價金九拾錢
紙數八百頁　郵稅金八錢

◉讀賣新聞評、孟子の全文を和譯して之に註解を附し上欄には五十音に基く索引を添へ書中の一語を知るときは直に其全文を求め得るの便に供したり……其和譯の正當なる註釋の穩健にして平易なる世に貢獻する所少なからざるべく殊に孟子の書は其議論の奇拔なる其文章の雄健簡潔なる支那文學中推して第一位に置くべきもの靑年子弟の讀物として最も現代に適切のもの……此國民修養の一大格言集より隨意に欲する處の語句を索出し得るは何よりも愉快とせざるを得ず

新譯漢文叢書第四編　大町桂月先生譯評　（最新刊）

○新譯　日本樂府

紬珍天金箱入特製　正價金五拾錢
紙數三百五十頁　郵稅金六錢

當代に異彩を放てる大町桂月先生擢きに日本外史を譯せられ今又賴山陽の啄史日本樂府を譯するのみならず之を釋し之を評せらる徹底の見老熟の筆明快を極めて渾然として桂月一流の名文となり朗朗誦すべく尊王の詩人又愛國の詩人として古今に獨步せる賴翁の氣魄と筆致とを躍動せしむ以て日本歷史を知るべく以て士氣を鼓舞すべし日本男兒之を讀まば必ず案を拍つて起たん

新譯漢文叢書第五編　大町桂月先生譯評　（再版）

○新譯　日本政記

紬珍天金箱入特製　正價金八十錢
紙數六百廿餘頁　郵稅金八錢

賴山陽前に日本外史を著して武門の興廢を說き、後に日本政記を著はして朝廷施政の大綱を明にせり。先頃喧騷を極めたる南北朝問題の如きも、翁が八十年前政記に於て既に解決したる所にして、兼ねて維新の一大原動力となりたる所なり。殊に政記は翁が死に至る迄も手删して止まざりしものにして、翁が尊王愛國の精神の形見なり。識見正大、文章雄健、光鋩陸離として、實に史界の一大偉觀たり。然るに從來世に行はれたる政記の板本は校訂粗漏にして誤謬甚だ多し。大町桂月先生亟に之を譯せられ、一々精密に誤謬を正し、難解の語に解釋を施し振假名を付し、先生獨得の痛快なる醫評を隨所に加へて筆力縱橫、熱血筆端に迸り、翁と先生との氣骨相俟つて紙上に活躍し、錦上更に花を添ふるの觀あり。日本政記の面目茲に一新す。日本國民必ず一本を備へざるべからず。

新譯漢文叢書第六編　久保天隨先生譯評　（三版）

○新譯　十八史略

紬珍天金箱入特製　正價金八十錢
紙數七百頁　郵稅金八錢

上下四千餘年、興亡八十餘朝、支那歷史の殆んど全體は、十八史略の一書に因りて、その大概を領知すべし。加ふるに、この書は、譯者が特に意を用ゐしものにして、妥當穩健、復た一字一句も苟もせず。卷中に挿入せし數百條の評語も悉く奇警峭拔、言外の微旨を闡明して、剩すところなし。敢て江湖の一讀を勸む。

新譯漢文叢書第七編　友田宜剛先生評解

○新譯評解　續文章軌範　全七冊縮刷全壹冊

袖珍天金總クロース特製紙數壹千頁　正價金壹圓　郵稅金八錢

續文章軌範は正文章軌範と並んで作文書の雙璧、古人が心血を濺ぎたる千古の名文陸離として光彩を放ち文に志す者は必ず之を坐右に致して日夕に師とし友とすべし本書は作文教授の泰斗友田先生が刻苦研鑽多年の螢雪を積んで之を完全なる明治の作文模範化せられたるもの其異彩特長正篇と相同じく作者略傳、解題、大意、語釋文法、通解、總評、新式活字ゴシックの譯文、上欄の原文何れも燦然として光を發ち、正續彼此相待つて日月を並べ懸けたるが如し、冀はくは江湖の諸彥一書を坐右に備へよ

新譯漢文叢書第八編　大町桂月先生譯評　全五冊縮刷全壹冊

袖珍天金總クロース特製　目下印刷中

○新譯國史略

萬世一系の天皇を戴けるを知らず人心輕佻となり浮華となり尊王愛國の精神失せて士氣銷磨せんとするは今の世の大患なり世の歷史教科書は唯歷史の骨組のみありて肉なく血なしならずんばあらず大町桂月先生茲に憾とする所あり先に日本外史日本政記日本樂府を譯されこと今又國史略を譯さる國史略は古來の諸國史の粹を拔き要を取り日本全史として最も國民的なること既に定評あり筆を開闢に創めて篇を聚樂第行幸に結びたるにても作者の精神を諒とするに足る二十年前迄は戶々に誦せられたるにも係らず漢學教育衰へし現今に際し此名著も空しく吾人の念頭より閑却されんとする時に當り現代の文豪大町桂月先生之を譯し之を解し更に適切なる批評を加へて有益なる貴重なる國史略茲に復活す

266
487

004679-000-2

特63-607

先哲叢談

大町　桂月／訳

M44

ACE-1354

266
487

特
60